始

050158

372-744

111

東海道五十三次

附

名數雜談

文學博士

矢賀芳一著

東京

冨山房発行

(大正元年)

大正
1.10.7
内交

はしがき

日に幾回となく、東海道を上下する汽車中の老若男女、喜の旅もあれば、悲の旅もある。汽車と馬や駕籠や徒歩の區別こそあれ、二千年來同じやうに之を繰返しつつあるのである。日本武尊の御東征をはじめ、業平朝臣の東下り、宗盛の捕はれ、阿佛の訴、さては彌次郎兵衞、北八の滑稽に至るまで、我が國の歷史、傳說、文學、風俗が東海道の上に印せられ、東海道と結付いて居ることは極めて多い。もし此の短い筆のすさびによ

東海道五十三次

目次

はしがき……一
一　竹芝寺……六
二　義士の墓……九
三　鈴が森……一三
四　玉川……一四
五　生麥……一六
六　熊の茶屋……一九
七　神奈川……二一
八　清淨光寺……二三

つて、讀者が人文の變、時代の面影を思浮べる便ともならば、筆者の喜、之に過ぎたることは無い。附、名數雜談も、名數につれて、往古文物の回憶を主としたのである。五十三次といふのも、つまりは一の名數である。

明治四十五年七月

著者しるす

目次

九　小栗判官……二六
一〇　滄浪閣……二八
一一　虎の石……三〇
一二　鳴立澤……三三
一三　小田原……三四
一四　早雲寺……三七
一五　箱根の關……三八
一六　黄瀬川……四〇
一七　東海道一の美觀……四二
一八　富士の詩歌……四四
一九　富士の宛字……四七
二〇　富士の異名……四八

二一　火の山……四九
二二　かぐや姫……五一
二三　人穴……五三
二四　卷狩……五三
二五　鳴澤……五五
二六　腹を立つ……五六
二七　富士川……五六
二八　田子の浦……五九
二九　驛路の鈴……六一
三〇　清見寺……六二
三一　鮹和尚……六三
三二　天の羽衣……六四

三三 靜岡……六六
三四 燈闇數行虞氏涙……六七
三五 吐月峰……六九
三六 うつの山……六九
三七 大井川……七一
三八 菊川……七四
三九 夜泣石……七五
四〇 わらび餅……七七
四一 無間の鐘……七八
四二 事のまゝ……七八
四三 櫻が池……七九
四四 熊野……八〇

四五 天龍川……八三
四六 女武者……八四
四七 賀茂眞淵……八五
四八 三方原……八七
四九 濱名の橋……八八
五〇 汐見阪……九〇
五一 窟觀音……九〇
五二 豐橋……九一
五三 狐の嫁人……九二
五四 三河聖……九二
五五 三河萬歲……九四
五六 矢矧橋……九五

五七　淨瑠璃姫……九六
五八　八つ橋……九七
五九　名物有松絞……九九
六〇　桶狭間……一〇〇
六一　鳴海潟……一〇一
六二　笠寺……一〇二
六三　熱田神宮……一〇三
六四　七里の渡……一〇五
六五　名物燒蛤……一〇七
六六　四日市……一〇八
六七　白鳥陵……一〇九
六八　燒米……一一〇

六九　蝦夷櫻……一一一
七〇　關の地藏……一一一
七一　鈴鹿御前……一一三
七二　近江路……一一五
七三　野路の玉川……一一六
七四　瀨田の唐橋……一一七
七五　俵藤太……一一八
七六　鴈の海……一一九
七七　石山寺……一二一
七八　兼平塚……一二三
七九　義仲寺……一二五
八〇　大津……一二六

日次

八一　逢阪關……一三七
八二　關寺小町……一三八
八三　山科……一三九
八四　稲荷山……一三九

附錄

名數雜談……一—九六

東海道五十三次

文學博士　芳賀矢一

はしがき

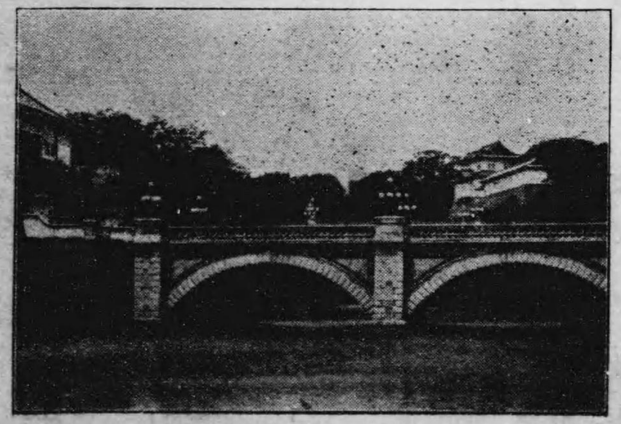
太田道灌が千代田、寶田、齋田の地を檢べて、江戸の城を築いたといふのは今から四百五十餘年の昔、家康が覇府を江戸に開いたのはそれから百五十年程も後である。道灌の靜勝軒は、

我が庵は松原つゞき海近く
富士の高根を軒端にぞ見る

といつたので、其の打開いた眺望の容子が知られるが、家康入府以後は俄に町屋が立並んで繁昌して來た。けれども皆草葺ばかりであつた。慶長六年十一月

の大火事で江戸中一軒も殘らず燒けたので、此序に板葺にせよといふ御觸が出た。其の時に瀧山彌次兵衛といふ男、表棟半分を瓦で葺き、後半分を板で葺いたのが、大評判になつて、「本町二丁目の瀧山彌次兵衛は家を半分瓦葺にしたさうな。奇特な事ぢや」と半瓦彌次兵衛といふ仇名を得た。是がそも〳〵江戸市中の瓦葺の始だといへば、其頃の江戸はとても今日の東京とは比較にならぬ。朝鮮人接待の爲に諸國から雜子を集めた。その鳥屋の近所にあつた

二重橋



橋が雜子橋で、又其の下に一本の丸木を渡した橋があつた。これが一ッ橋。又其の次に竹を編んで渡した橋が竹橋。御城の大手に稍大きな橋があつたから、是は大橋といふ位なもので、城廻の橋も實は名も無かつたのである。それが僅かの後の萬治頃には「大名町、商人の市の棚、諸職人の家々、小路々々、町々、縱横の橋までもにぎやかさ、人の往來黑土を蹴上げて、よそ見をして通るものは突倒され、踏轉ばされ、口をあさてゐるものは息の詰る程砂ぼこりを吹き入れらる」とあつて、元祿時代になると、

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春

の繁華となつた。死者十萬八千人を出したといふ明暦の大火をはじめ、幾回となき大火災も大都の勃興的氣運には打勝つことが出來ない。火事は江戸の花と歌はれて、「燒太り」といふ語は市民をして火事を何とも思はせなかつた。元祿時代の繁昌といつても、馬喰町の近傍にはまだ宿屋が十軒位あつたばかりだと

いふが、江戸の町は燒太りに益〻太つて、隅田川の三角洲の發達とともに、郊外も次第に都會に接近して、世界に類の少い大きな都となつた。さうして明治になつて、日本帝國の首都となる用意をして居たのである。

王政維新、皇上のいます都となつてからの發達は、亦いふも愚かな事である。江戸時代に唯一の名物とした眼鏡橋も今は取崩されて、電車は四通八達の須田町から一直線に新橋までの大通りとなつた。昔東海道の起點として「お江戸日本橋七ツ立」と歌はれた日本橋も、一等國の首府の中心としては餘りに見すぼらしいといふので、改築がいよ〻出來上つた。名高い魚河岸も移轉問題が起つて居る。時世の變遷は實に驚くべきものでは無いか。京の夢、大阪の夢と言つた時代には、早駕で通しても京都までに一週間はかゝつた。それが今は寢臺車附の汽車で一睡して覺めれば加茂川の水で顏を洗ふことが出來る。越すに越されぬ大井川も、夢うつゝのうつの山も、鐵橋が出來、トンネルが有れば何の

苦も無い。今川義元の根據地であつた駿遠參三州も、信長や、秀吉や、家康の崛起した參、尾、濃の平野も瞬く中に通り過ぎて、不破や、逢坂の關の跡を訪ふ人も無い。今になつて東海道や中仙道の優長な昔の旅路を思へば、兒戯に類したとも考へられる。今の青年諸君は日本地理の教科書に於て、東海道鐵道の沿路を學ばれるであらう。更に進んでは、亞米利加横斷の鐵道も、亞比利亞鐵道の線路も學ばれるに相違ない。其等の智識は今の世には固より大切であるが、昔の日本の旅路のあはれを知ることも亦必要である。

昔の物語に名高い京都と東國との往復はいつも京都を起點とした、いはゆる東下りである。伊勢物語の業平も、平家物語の宗盛も、太平記の俊基も皆京都から出て東路へ下つたのである。はる〻と花の都を出て風俗も賤しい下國の田舍へ下つたのである。鎌倉頃の紀行文では東關紀行といふ書物もあり、海道記といふものもあり、又女の書いた十六夜日記といふのもあるが、皆京都から

の紀行で、京都を出て東へ下るといふことが既に一種の物のあはれを催すのである。徳川時代になつて、江戸が繁昌の都會となつてからは、江戸から發足して京都へ行く紀行がいくらも出來た。東海道名所記や東海道中膝栗毛や、あはれよりもむしろ滑稽で、旅行の面白味を寫して居る。今の大御世ではもとより東京發が下り列車で、京都發が上り列車である。

急行列車の旅行では途中で何も見られぬ。さりとて一々昔の五十三次に立寄つては却つて退屈であらう。急いで參らうと存ずるといふ能役者位の程度で、道道の名所舊蹟を見物して行かうと思ふ。

一　竹芝寺

今の道中双六の振出しは新橋停車場である。一聲の汽笛を後にして、左手に芝離宮を見れば、烟波浩渺たる芝浦は直ちに眼前に展開して來る。遙かに望む

房總一帶の青螺、內海の事とて海面は疊を布いたやうてある。かの

春の海ひねもすのたり〳〵かな

は眞に此の如き風光を言つたものであらう。「七砲臺邊波萬重、」などいふ可は大袈裟に過ぎる。「送迎英米佛魯舟」とも言つたのは皆昔の黑船時代のなごり、東京灣築港の竣成しない限り、巨艦大船は到底出入が出來ない。其の代り築港が出來た曉には、此の邊一帶から採れる淺草海苔は無くなるだらうなどと餘計な心配をする。こゝは早くから竹芝の浦といつて、竹芝浦に就いては一つの古物語がある。

昔此の近邊の一人の男、京都の御所の火たき屋の衞士となつた。「御垣守る衞士のたく火の」といふ、其の衞士になつてゐたのである。或時御庭を掃除して居ながら、獨言を言つた。

「などや、苦しき目を見るらん。我が國に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし

渡したるひたえの瓢の、南風吹けば北に靡き、北風吹けば南に靡き、西吹けば東に靡き、東吹けば西に靡くを見て、かくてあるよ。」

此の獨言を聞いて不思議に思はれたのは時の天皇の唯一人の皇女であつた。御簾を押上げて、其の男を召し給ひ、今言つた事をもう一度言上せよとの御沙汰、前の通り申上げると、さらば其の國に連つて行つて見せよとの御諚である。あまりに恐れ多い事とは思つたが、どうしても其の瓢簞が見たいとの仰故、遂に意を決して、其の姫宮を背負ひ奉つて、足に任せて走つた。追手が來るに違ないと、瀬多の橋を一枚毀して、それを飛越えて、七日七夜走り續けて、とうとう武藏國まで着いた。朝廷では皇女が御見えなさらぬといふので、上を下への騒動、其の中に誰言ふともなく、武藏から來て居た衛士が、非常に香ばしい匂のするものを頸に引きかけて飛んで行つたと評判した。それに違ないと追手を向けられたが、瀬多の橋が毀れて居るので、急には行かれ無い。やう〳〵三月

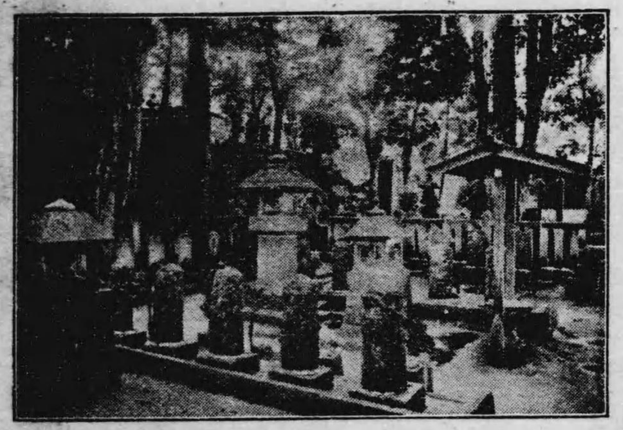
立つて、此の男の家を尋ね當てた。さて皇女はと見れば、早や此の田舍住居にお慣れになつて、追手の使を召し出して仰せられるには、

「此の男の家が見たさに、連れて行けと言つたので、此の男には何の罪も無い。此處は如何にも住心地がよいから、いつまでも居ようと思ふ。早く歸つて此の由を奏上せよ。」

と仰せられた。返つてその通り申上げると、天子様も一旦はお歎であつたが、これも何かの宿世であらうと、其の姫宮に武藏國を預けるといふ勅命が下り、竹芝の男は一生姫宮様をお守りして、こゝに住み、宮様のお隱れになつてから、その跡が竹芝寺といふ寺になつたといふと。

二　義士の墓

今も高輪から品川へかけてはお寺が澤山ある。泉岳寺、東禪寺、東海寺、海



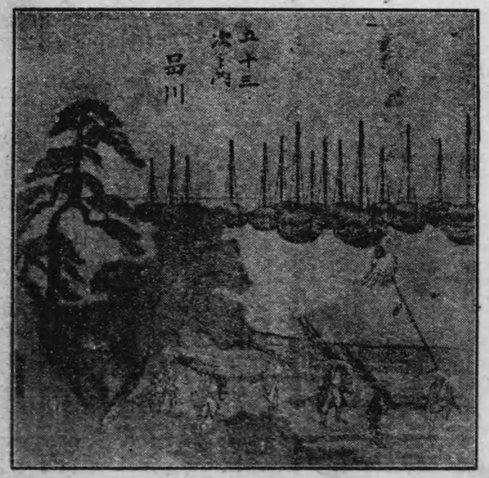
四十七士の墓

晏寺などは皆名高い。中にも泉岳寺四十七士の墓は一年中香花の絶える事がない。冷光院殿吹毛玄利大居士の法名を鐫りつけた淺野内匠頭長矩の墓、傍に忠誠院刃空淨劍居士の大石内藏助良雄をはじめ四十七人、いづれも法名には刃と劍の二字を挿んで、秋霜烈日、犯し難い忠魂義膽を埋めて居る。世は太平に狃れて、淫靡驕奢の風やう〳〵に生じた元祿の世に、天下の士氣を振興鼓舞させた此の一快擧は、日本武士道の花であると同時に、永遠に國史の

裝飾であり、國民の教訓である。これは實に德川文教の結果であつた。夙に古學を唱へた山鹿素行が赤穗藩士一般に及した感化力はいふまでも無い。一味中の小野寺十内秀和は京都詰で、伊藤仁齋の門人であつた。大石良雄も仁齋の門に聽講したことがあると傳へられて居る。一方に於て西鶴や門左衞門の小說淨瑠璃のあらはれる時代、一方には道義の學を以て士庶を導く大儒の續々として輩出した時代である。仁齋の子東涯には義士行といふ長篇の詩もある。室鳩巢は赤穗義人錄を著はして義士といふ名稱は鳩巢から起つた。當時の人々の義士論評を集めたものに赤穗義人纂書といふものがあつて、近頃國書刊行會から出版せられた。さて義士の處分法に就いては、當時色々な論爭があり、林大學頭は助命を主張したが、荻生徂徠は國法は斷じて曲ぐべからずといふ趣意で死を賜ふべしと上書した。十二月十五日復讎の翌日四箇所へお預け、一月も過ぎて、二月の四日一同士分の禮を以て切腹を仰付けられたのである。かういふ

人をむざ〳〵死なすことは、人情から見れば、誰も殘念に思つたに相違ないが、此の一同の切腹は義士の最も本懷とする所であつて、亦義士の名を全うせしめた所以であつた。

幕末東禪寺に寄宿して居た英人等がまづ通事からの話も聽き、又現に累々たる四十七の墳墓を見た感想は如何であつたらう。腹切の語は外國に輸入せられた日本語の中で最も古いものの一つである。今はウェブスターにもスタンダードにも載つて居る。日本の武士は如何なるものであるかといふことを、第一に外國人に語つたのは即ち此の四十七士の墳墓であつた。しかも其の後長



州武士が東禪寺の斬入で其の實證を示されたのには流石に驚いたであらう。

汽車が品川停車場を出ると、間もなく右手に石の鳥居のある墓が見える。あれが國學者で有名な賀茂眞淵翁の奥城處。汽車は東海寺の寺内を切つて通つて居るので、物徂徠の門人の服部南郭の墓や、東海寺開山第一世の傑僧としてよりも、寧ろ澤庵漬の發明者として弘く國民に知られて居る宗彭澤庵の墓は汽車道の左手の方にある。今は色々の工場が此の邊に立て込て來た。

海晏寺は紅葉の名所として知られて居たが、維新元勳の一人贈正一位岩倉具視公は明治十六年國葬を以て此處に葬られた。同じく維新前後に功勳の高かつた越前藩の松平春嶽公も明治廿三年薨去。此の境域内に永眠せられて居る。

三　鈴が森

乘りかけお馬の鈴が森は幕府時代の御仕置場であつた。汽車の線路は昔の街

道を離れて海岸よりは遠いが、今大森海水浴とて賑ふ八幡濱よりもまだ少し手前、街道の傍に小さな佛堂、慈悲の眼を以て衆生を見そなはす石地藏一基、老婆の守つて居る昔風の掛茶屋、これが芝居てするお駒才三や、八百屋お七や、平井權八等の所刑せられ、梟首せられて生耻をさらし、死耻をさらした場處である。獄門にさらされた生首の並んで居つた夜道などは嘸物凄いことであつたらう。吉田松陰や、賴三樹三郎や、橋本左内や幕末の志士が斬られたのは此處ては無い。あれは千住の小塚原であつた。

四　玉　川

いつぞや急行列車の墜落した川崎の鐵橋は恐くは日本鐵橋の最も古いものであらう。橋の下の川は今は六郷川といふ。

玉川にさらすてつくりさら〳〵に

なにぞこの子のこゝだかなしき

と萬葉集に詠んだ玉川である。歌枕として知られて居る玉川は全國に六つある。山城、攝津、近江、紀伊、陸奥、武藏である。山城の井手の玉川は山吹の名所、陸奥の野田の玉川は千鳥の名所といふ樣に、それ〴〵の附屬物があるが、こゝのは調布である。川水に布を晒した昔の風光が思ひやられる。此の上流の矢口の渡は、新田義興が恨を呑んで死んだところ、今はその跡を尋ねる人も少いが、之に反して盛なのは大師川原の平間寺である。厄除大師といふので、厄年の迷信から參詣の人はいつゝ絶えない。池上の本門寺と共に界隈切つての大繁昌である。尙それよりも盛なのは、蒲田の海岸に近い羽田の穴守稻荷、これが十四五年以來俄かに大繁昌して、電車鐵道まで出來るやうになつたのは、迷信の力は實に恐ろしいものてある。昔の高僧知識は自ら大山長河を跋渉して、人跡絶えた深山に大伽藍を起して、文明を扶植したが、今は法燈の光が衰へたの

か、そんな事てに追付か無い。汽車の沿道か何かて無ければ都合が惡い。能登の曹洞宗大本山總持寺もとう〳〵鶴見の近傍へ移轉して來た。話は横道へはいつたが、玉川は即ち東京市水道の本源、都市三百萬生命の繫がる所である。

五　生麥

鶴見川の川口近く元の生麥村の地に新しい碑石がある。

文久二年壬戌八月廿一日

英國人力査遜殞ニ命于生麥村一。因爲ニ之歌一。歌曰。君流レ血兮此海壖。我邦變進亦其源。强藩起兮王室振。耳目新兮唱ニ民權一。擾々生死疇知レ聞。萬國有レ史君

名傳。我今作レ歌勒ニ貞珉一。君其含ニ笑于九原一。

明治十六年十二月　　敬宇　中村正直　撰

近世史に隱のない生麥事件の死者英人リチャードソンを弔つたのてある。此の碑文は明治維新の大宏量を示したものてあるが、事件の當時は尊皇攘夷論の盛な最中、薩摩侯島津久光は鹵簿肅々此の地に通り掛ると、騎馬の英國人二名は忽ち鹵簿を横切つて駕廻に近づいた。唯さへ異人を憎しと思ふ矢先、狼籍者と言ひも敢へず、一人の英人リチャードソンは一刀の下に斬倒され、他の一人は負傷して逃げ去つた。是は碑文にもある通り文久二年八月廿一日の事である。翌年五月英國軍艦薩摩海に來り、生麥死者の妻孥養育金として金十二萬弗を得たいと請求した。薩摩藩答へて、償金はよし與へるとしても、幕府の許可を得なければならぬ。且つ外人遊行地ても無い所を乘馬遊行して、伴廻りを侵すとは無禮以ての外てある。かくの如き者を斬つて捨てるのは日本武士の當然

の事であると、言放つた。英人大に怒つて、遂に鹿兒島の砲擊となつた。此の時の薩摩武士は眞裸になつて犢鼻褌一筋で奮戰したといふことである。其の中英艦もいつか去つて仕舞つた。リチャードソンは支那あたりに居つたこともあつて、東洋人を馬鹿にして居た爲、其の奇禍を買つたのである。支那人と日本人とを同一に見做したのである。東禪寺事件は長州武士、生麥事件は薩州武士で、明治維新史の最初の頁に記載せられる事柄である。

日英同盟が成立して、世界の平和を維持し、日英博覽會がロンドンに開設せられるといふ今日から見れば恩讎兩ながら空しくて、總べて唯夢のやうである。鹿兒島の砲擊は一方に於て、鹿兒島武士の思想を一變させたのである。鐵砲玉はすべて圓い者と信じて居た薩摩武士は、此の時始めて先の尖つた砲丸の飛んで來るのを見て、外國の侮れぬことを悟つたとの話。赤間關砲擊と共に、攘夷說から開港說に豹變させる一大動機となつたに違ない。當時英國からリチャードソン遺族扶助として申込んで來た人名中には nothing とか nobody とか、anybody とかゝ加減な作り名が拵へてあつたといふことを聞いた。眞僞は知らぬが、そんな事もあつたらうと思ふ。全國の中學生が英語を操る今日と比べれば、世變は實に驚かざるを得ない。

六　熊の茶屋

昔の徒步の旅では、朝早く江戸を出發して、泊は程ヶ谷あたりである。短い冬の日の急がぬ旅では、神奈川で日が暮れて仕舞ふ。

今やかく響さわたらゝ聞き慣れし
淺草寺の入相の鐘

といふのは香川景樹が神奈川あたりで暮方の鐘の音を聞いて、江戸住居の夕暮を思ひ出した歌である。その景樹の紀行中に、當時此の近邊の茶屋に熊を飼つ

て居たことが書いてある。茶屋の主人の話に、此の熊は、春は芹ばかり食つて居たが、今は秋で柿を喜んで食ふ。人が柿をやれば必ず叮嚀にお辭儀をして喰べる。母熊が殺された時、胎内から出て、その儘に養はれたので、母を割いた刀の先が子熊の月の輪に觸れた爲、子熊の命も危かつたが、幸か不幸か、命だけは取止めて、飼はれて居るとの話、現に月の輪に其の時の創痕が殘つて居ると、頭を持上げさせて其の傷を示したとある。そこで景樹は、

月の輪にかゝれる跡を仰ぎても
見するやくまと名のるなるらん

と歌を詠じて居る。此の歌は面白くも無いが、憐れな子熊の因縁話を紀行中に書入れたのは流石に歌人の情緒が忍ばれる。旅茶屋の店先で熊に餌をやつて居る長閑さの中には眞に太平の面影が浮ぶ。

* * * * *

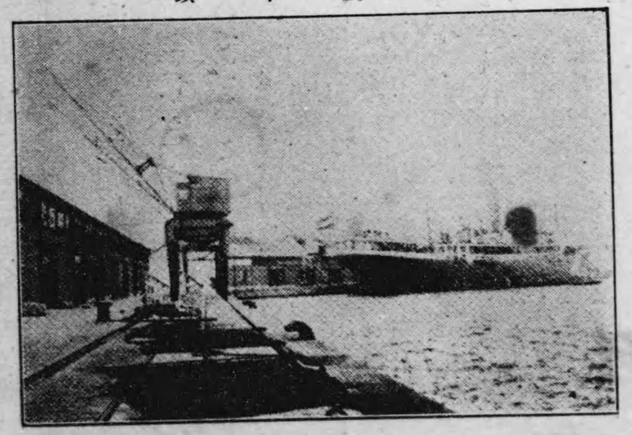
七　神奈川

茶屋といへば神奈川近傍には、外から裏の海が見える見晴しの好い茶屋が澤山あつた。「お休みなさいャアせ。暖かな冷飯もございャアす。袁立ての肴の冷めたのもございャアす。」と爭うて客を引いたのである。これから程ヶ谷、戸塚となつては、又しばらく海に離れるので、こゝに一憩して眺望を恣にするのは旅客の一つの慰てあつたらう。此の驛に浦島寺があつて、浦島が龍宮から還つた後、玉手箱を箱根山で開いて、忽ち白髮の老人となり、親の墓を尋ねてこゝまで來たといふ傳説が附會せられたのも、つまりは此處の海景色の非常に美しいから起つたことであらう。元から良い港で諸所から多くの船が集つて來たが、其の頃の眺には今の汽船や軍艦は無かつた。今は世界に名高い横濱港で帆檣林立、何萬噸といふ大船も波止場に横附にされる。世界各國の軍艦商船、

出入頻繁で、眞に帆檣林立の壯觀を呈して居る。神奈川臺の下には高島町、平沼町などの埋立地も出來て、横濱まで一續きの繁榮、最近四十年間に人口三十萬の横濱市が現れ出たのは蜃氣樓の奇觀にもまさつて、五十年前の人に見せたら、誰しも浦島が子と同一の驚愕に打たれるであらう。

新に野毛山上に建てられた井伊直弼の銅像、人をして坐に幕末維新の世を追想せしめるが、當時怨恨の府となつた掃部頭の事とて、此の銅像は未だに

横濱埠頭



横濱市民にも引取られないさうである。鎖港開國皆一場の昔話で、今や此の新大都を往來する人種には、歐羅巴人も、亞米利加人も、印度人も、南洋人も、ありとあらゆる世界の人種が悉く代表せられて居る。これに就いて想ひ起すのは、享和元年太田蜀山人が大阪へ行く途中、程ケ谷、戸塚間の燒餅坂で和蘭献上の莚包の長持に逢つた事である。此の時代には和蘭だけが、貿易を許された外國人で、時々幕府に献上物をしたものである。蜀山は此の時の感想を記して、紅毛、外夷の人が譯を重ねてかく來朝するのは誠に目出度い事であると書いて、芭蕉の句の

阿蘭陀も花に來にけり馬の鞍

を思ひ出したと言つて居る。

八　清淨光寺

清淨光寺

藤澤山無量光院清淨光寺とむづかしくも言ふし、遊行寺とも簡單に言ふ藤澤

寺は時宗の大本山で、今から凡そ六百年以前建立の由緒ある舊刹である。時宗の祖は一遍上人、高野道廣の二男松壽丸といつた人で、建長五年出家、淨土の教を受けて遊行宗の一派を開いた。謠曲の誓願寺に、

是は念佛の行者一遍と申す聖にて候。我此の度三熊野に參り、一七日參籠申し、證誠殿に通夜申して候へば、新に靈夢を蒙りて候。六十萬人決定往生の御札を普く國土に弘めよとの靈夢にまかせ、先づ都へと志して候。

とあるのは此の上人である。日本諸國を遊歷すること十八年、五十歳で入寂した。此の上人が世人の渴仰を得たことは即ち誓願寺の一曲でも分る。此の曲は和泉式部の亡靈が現れて誓願寺と打つた額を除け、上人の手跡で南無阿彌陀佛六字の名號を書いて吳れと賴んだのである。藤澤寺は宗祖一遍上人から第四世呑海上人の時に出來たので、それから連綿と今日まで法統が絶えない。十二世

は龜山天皇第四の皇子尊親法親王が嗣がれたので、一層此の寺の尊崇を益した。代々の上人は皆遊行上人で、諸國を遍歷して衆生を濟度するのを務とする、これも謠曲の遊行柳に、

「歸るさ知れぬ旅衣、法に心や急ぐらん。」「是は諸國修行の聖にて候。我一遍上人の教を受け、遊行の利益を六十餘州に弘め、六十萬人決定往生の御札を普く衆生に與へ候。此の程は上總の國に候ひしが、是より奥へと志し候。

「秋津洲の國々めぐる法の道、迷はぬ月も光添ふ、心の奥は白川の關路と聞けば秋風も、立つ夕霧のいづくにか、今宵は宿を借衣、日も夕暮になりにけり。」「急ぎ候程に、音に聞きし白川の關をも過ぎぬ。又是にあまたの道の見えて候。廣き方へ行かばやと思ひ候。

とあつて諸國遍歷の容子が知られる。此の曲は非情の草木柳までも佛果を得させたといふ物語である。惜しいかな昨年の失火で、色々の國寶まで燒いてしま

つた。

九　小栗判官

世に傳へた小栗判官の話も、遊行上人と關係がある。此の話は鎌倉大草紙といふ書物に出て居る。それで見ると、應永三十年の頃、常陸國の住人小栗孫五郎滿重といふもの、謀反して鎌倉の命令を聽かない。足利持氏征伐の爲、結城まで出陣、小栗の城を攻めたので、小栗は間もなく落城、滿重は三河國へ逃落ちた。こゝに滿重の子に小次郎といふもの、忍ンで相摸の權現堂といふ所に居たが、其の邊の强盜ども、小栗の富者なるを知つて、打取つて寶物を奪はうと相談した。家來も多いので、手出しかねて居ると、一人の盜賊が、御馴走をして酒の中へ毒を入れて殺せば容易だらうと、早速其の事に極めて、酒をすゝめた。其の時酌に立つた女の中に照姫といふものがあつて、小栗に耳うちして

竊に賊の計略を告げた。因つて小栗は飲んだ風をして一滴も、その酒を飲まず、外へ出て見ると、林の中に鹿毛の馬が一頭繫いである。此の馬は盜人どもが往來で盜取つた馬であつたが、第一の荒馬で、御しかねて林の中へつないで置いたのである。小栗は無双の馬乘故、これ屈竟と、身廻りの財産を持つて、其の馬に打乘り一鞭あてゝ落行いた。さて遊行寺へ行つて、上人に事の由を話すと、上人は憐んで僧徒を附添はせて三河國まで送らせられた。家來どもも、女等も盜人に川の中へ投入れられたが、照姫だけは始から酒を飲まなかつたので、命が助かつたといふのである。大草紙の話はこれだけであるが、俗間に傳はつた話では、遊行上人が六字の名號のお札を水に入れて飲ませられると、家來十人も一同に酒の醉が醒めて生返つたとなつて居る。これが後の芝居に作られた小栗判官照手姫の傳說である。

藤澤から江島、江島から鎌倉、今は電車もあつて自由の往復が出來る。小栗

小次郎の鹿毛の馬も入らぬし、腰越の驛で義經がせき止められた事も今日から見ればをかしい樣にも感ぜられる。半日の回遊で鎌倉の舊都の巡覽も出來るが、先を急ぐから鎌倉は省く。湘南一帶の地、鎌倉といはず、茅が崎といはず、平塚といはず、すべて都人士の避暑地となつて、到る處に別莊が出來て居る。此のあたり汽車の窓から右に、すぐれて高い山が見える。關東平野の中では、殊に日立つから大山といふ名のついたのも當然である。雲霧の常に立籠めるといふので雨降山とも言ふ。夏の頃になれば、參詣の道者は絡繹として絶えない。平塚の停車場は之が爲に大に賑ふ。山上には瀧もある。西洋人の探勝に出掛けるものも多い。

一〇　滄浪閣

近年の海水浴場としての開山は大磯である。維新以後さびれ果てた大磯は、

海水浴の爲に復活したのである。鎌倉時代の大磯は隨分の繁昌であつたらうが、德川時代五十三次の一としての大磯も、其の繁昌は知れたものである。德川初期の東海道名所記にはこの邊には追剝が多いと、大に警戒して居る。それが維新後になつては一層寂しくなつたのであつたが、海水浴の爲に面目を一變して、大臣富豪の別莊が隙間も無い程建て列ねられた。中にも名高いのは滄浪閣である。「滄浪閣外水如レ天」と口吟して、こゝの海風に嘯かれた春畝老公も、最早泉下の人となられたが、此の滄浪閣は明治の歷史と共に萬世に傳はるべき大磯の紀念物であらう。停車場を出て、正面の丘陵は天下の富豪岩崎家の別墅、其の方面に向はないで、鐵道線路に傍うて一直線に滄浪閣に通ずるのがいはゆる統監道である。滄浪閣は高く天を衝く老松の間に建てられて、怒濤を眼下に看る地、舊街道の左手にある。

一一　虎の石

鯰の頭を押さへて居るといふ常陸鹿島の要石、九尾の狐の成れの果と傳へられた下野那須の殺生石、夫にこがれた望夫石、母を慕うた夜泣石、石に關する物語は諸國に多い。大磯延臺寺の虎の石はいつ頃から置いたものか。圓い石に刀瘢があつて、曾我十郎の身代りに立つたのだといふ。十郎五郎の仇討は日本仇討の元祖といふ程、世間の同情を得た。二人の孤として、あつたら壯年の若者が富士の裾野の露と消えたといふことが、多大の同情を惹いたのである。同じ頃公曉が實朝を討つて親の仇を報いたといふ事件もあるが、これは何人の同情をも得ない。固より得ないのも當然であらう。曾我兄弟の曾我物語に語られ、ノハハ幸若舞に舞はれ、謠曲に入つて、多くの曲を成した。その結果は又芝居に採られて、正月の初狂言は曾我物語で蓋を開けるのが吉例となつた程である。後世

の人に感化を與へたことは實に多大てあるといはねばならぬ。鎌倉時代武士道發達の初期の出來事として、徳川時代の赤穂義士と、是は孝、彼は忠、前後相照應して居る。大磯には唯虎の遺跡があるばかりてあるが、遙かに西の空を望めば箱根の二子山が淡靄の中に並んて立つて居るのも何となく似つかはしい。曾我里といふ所も程は遠くない。虎女の忌日には必ず雨が降るといふのて、之を大磯の虎が雨といふ。虎が雨の方が虎の石よりも餘程物のあはれは深い。名物虎子饅頭に至つては最も俗てある。虎といへば諸越が原、高麗山、大磯には唐に關係の

大磯の虎木像

因縁が多い。

一二　鳴立澤

大磯名所の一つとして鳴立澤がある。西行法師の歌に、

心なき身にもあはれは知られけり
しぎ立つ澤の秋の夕暮

から出來た名所である。是は唯鳴の立つ夕暮の寂しさを詠じた歌で、いはゆる新古今集三夕の歌の一つであるが、それをいつか鳴立澤といふ地名にして仕舞つた。伊吹山にかくと谷といふ谷があるといふ程でも無いが、能く似た話である。元祿の頃の俳人大淀三千風は西行法師を理想としたやうな人で、日本國中を行脚してあるいたが、此の俳人がこゝに草庵を結び、西行の風雅を追懐した。其の碑文は今もあり、草庵は今も俳人が守つて居る。飛鳥井雅章卿もこゝを

尋ねて、

あはれさは秋ならねども知られけり
しぎたつ澤のむかし尋ねて

と歌ひ、松平邑乗侯も、

今もなほむかしの秋を思ふぞよ
鳴立澤の夕ぐれの空

と詠んだ。冷泉爲久卿は流石に歌道の家故、此の歌の間違を咎めて、

こゝをのみ鳴立澤と思ひおかば
げに心なき身とや知られん

といつたのはをかしい。それよりも例の三千風が、

ありし世の鳴の羽音はさもなくて
今は澤邊に馬駕籠ぞ立つ

と言つたのは確かに德川時代の宿場の有樣を詠んだのである。「西行堂の後より海面を見渡せば實に小陶綾の磯の波立去り難き所なり。此の庵なからましかば、哀れさも優りぬべし」と蜀山も書いた。こゝの小堂にも虎女の像がある。妻子を捨てゝ諸國行脚の風流生活を送つた歌人と、情郎に立てた操に綠の髪を切捨てゝ念佛三昧に入つた千古の美人と、同一所の主人となつたのも不思議な因緣である。此のあたり今は別莊が嚴めしく立並んで、松風に交つて聞える蓄音機の音、物のあはれ所では無い。

一三　小田原

信越から伊豆に走る山脈が相豆二州の間に天嶮を作つて居る。こゝの街道は昔から箱根路と足柄路の二つがあつた。箱根路は近くて急で、足柄路は稍遠いが少し樂なのである。阿佛尼は女ながらも急いだと見えて十六夜日記に、

二十八日伊豆の國府を出てゝ箱根路にかゝる。まだ夜深かりければ、「玉くしげ箱根の山を急げども猶明け難き横雲の空」。足柄は道遠しとて箱根路にかゝるなりけり

と書いて居る。實にや「箱根八里は馬でも越すが」と歌つたが、こゝには鐵道の架設は出來ない。東海道線は國府津から足柄路に向つて進んで居る。それでも幾つとなきトンネル、出るかと思へばはいり、はいるかと思へば出て、右に左に溪流を見る。景色は東海道線中罕に見る所である。この溪流は即ち小田原の入口を流れる酒匂川の上流を成

箱根曾我兄弟の墓

す。酒匂川は古名鞠子川である。梶原が頼朝に川水をはね返したので頼朝がむつとした時、「鞠子川蹶ればぞ波は上りける」と地口つたといふのは即ち此の川である。曾我物語に「兄弟箱根にかゝりけるが、まりこ川を渡りつゝ手綱かいくり申しけるは、和殿三つ、祐成五つの歳より二十餘の今まで、此の川を一月に四五度づゝも渡りつらん」と言つたとある。國府津から電車に乘つて三十分程此の川を過ぎれば即ち小田原の町である。

主將務知レ攬ニ英雄之心一の一語を聞いて、「我能く關八州を平げん」と言つた北條長氏、伊豆の國を從へたのを手始に、遂には關八州を領してこゝを居城と定めた。氏綱、氏康、氏政、氏直五代の榮華は氣天下を蓋うた豐太閤の命令をも奉せず、長い城攻で、小田原評定の名をさへ、今日に殘した程、攻圍軍を苦しめ、遂に沒落した悲劇はあつぱれ關東武士の潔い所を示した。秀吉が陣營を布いた石垣山、舊城の排置等尙歷々觀る事が出來る。今はこゝに宮內省の御用

邸もある。長いといへば小田原提灯も長い。小田原の町も一本筋で中々長い。

氏綱時代に支那から傳來したといふ外郎の透頂香、八棟造の家は今も儼然と殘つて居る。彌次喜多の所謂凹凸の多い家である。彌次喜多は餅と間違へて食つたが、どんな味か余はまだ食べた事がない。とにかく小田原名物の一つである。すべて昔の五十三次には各驛それ〴〵の名物があつた。小田原の名物は梅干である。

一四　早雲寺

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や
　沖の小島に波のよる見ゆ

といふ實朝の歌は小田原の町はづれあたりから詠めた景色であらう。小田原から人車鐵道で海岸傳ひに伊豆に入れば湯河原、熱海等名高い溫泉がある。石橋

山の古戰場を探ることも出來る。馬車鐵道が箱根に通ふのもやはり溫泉のお蔭で、溫泉路の坦々砥の如く、車馬を通ずるのに引替へ、舊街道は崎嶇嶮難、雨でも盛に降れば道は即ち溪流と變ずる情態である。早川に架けた三枚橋を渡つて早雲寺に北條五代の墳墓を見るのも一興である。山門のあつたらしい所は畑と鋤かれて、書院の庭も苔蒸して居る。五代の墳墓は流石に文字も鮮かに讀まれる。

奪レ險而興恃レ險亡。興亡如レ夢跡茫々。
欲レ弔二其人一人不レ見。青苔綴レ石五墳荒。

一五　箱根の關

箱根一帶の山は火山脈である。往時の大噴火が今日の連山を作り、今日の蘆の湖を成して居る。すべて火山湖は景色が麗はしい。喘ぎ〳〵上りの四里を終へて湖畔に出れば目も覺めるやうに思ふ。右の方の箱根權現に曾我の箱王を想ひ起して、湖に傍うて行けば箱根の古驛、此の入口に關所があつたのである。

春風の手形をあけて君が代の
とざさぬ關を越ゆるのどけさ

には、太平の象が自からあらはれて居るが、賴三樹三郎の、

當年意氣欲レ凌レ雲、快馬東馳不レ見レ山。
今日歸途春雨冷。檻車搖レ夢過二函關一。

には悲憤の氣が滿ちて居る。何にせよ、東海一の難關といふので、詩人などは函谷關と同じやうに考へて居る。箱根の箱を函と書いて、函關といひ、又玉笥關などともいふ。これは歌の枕辭に「玉くしげ箱根」といふからである。箱根に關する詩歌は極めて多い。古來幾千の旅人はこゝを往來して、いづれも多少の感慨を抱いたのである。下り四里で三島の驛に着く。

一六　黄瀬川

三島から沼津までは電車鐵道がある。この途中に渡る川が黄瀬川である。黄瀬川の宿は昔の箱根道中で中々繁昌したものらしい。平家物語を見よ。

夜もすがら昔今の事ども語りて、相互に涙を流す。佐宣ひけるは、此の二十餘年の間、名をも聞きけれども、其の顔を未だ見申さゞりければ、如何にして見參すべきと思ひ給ひけるに、最前に馳來り給へば、故殿の生れかはり給へるかと覺えて、頼もしく覺え候。かの項羽は沛公を以て秦を滅す事を得たりき。今は朝頼義經を得たり。何か平家を誅伐して、亡父の本意を遂げざるべきとぞ宣ひける。そも〳〵此の合戰の事を聞きて秀衡如何申しけるぞと尋ねられければ、ゆゆしくも感じ申し候ひつ。新大納言以下近臣を失ひ、三條宮をうち、源三位入道を誅せし折節毎には兵衛佐は聞き給

ふらんなどと申し候ひき。去ぬる承安四年の春の頃より都を出て奥州へ罷り下りて候ひしに、秀衡昔の好みを忘れず、事に觸れて憐を致し候ひき。かく參り候ひつるも甲冑、弓矢、馬鞍、郎等に至るまで皆出し立てられ候ひしかば、かく參り候。然らずして、いかでか郎等一人も相具し候ふべき。十餘年が程、彼が許に候ひし志、如何にして報じ盡しぬとも覺えず候とこそ、九郎義經は申されけれ。

又義經記を見よ。

佐殿御陣と申すは、大幕百八十帳ばかり引きたりければ、その内は八ヶ國の大名小名並みゐたり。各々敷革にてぞ有りける。佐殿御坐敷には疊一てう敷きたれども、佐殿も敷革にてぞ在しける。御曹子は冑をぬぎて童に持たせ、弓取り

直し、幕の際に畏つて在しけり。その時佐殿敷革を去り、わが身は疊にぞ直られける、夫へ〳〵とぞ仰せらるる。御曹子は暫く辭退して敷革にぞ直られける、佐殿御曹子をつく〴〵と御覽じて、先づ涙にぞ咽ばれける。

これは即ち治承四年源頼朝が平家追討の軍を起したと聞いて、永らく奥州秀衡の許に居た義經が軍を引いて黄瀬川に來り會した時の樣子である。二十餘年ぶりの兄弟が舊を談じた其の夜は嘸かしうれしい事であつたらう。然るに此の時の事は忽ち忘れ果てた二人の不和、義經の末路もあはれであつたが、骨肉を屠り盡した頼朝の後も亦みじめな有樣であつた。

一七　東海道一の美觀

絲の如き大道長安に達する東海道中第一の眺は富士山に及ぶものは無い。富士山は東海道の飾であるのみならず、實に我が大日本國の誇である。昔の道中

ては三宿して尚其下を離れずと言つたが、今では刻々に變る車窓の眺望、何人も壯大崇高の念にうたれざるを得ない。沼津の東黑瀨松原、二津屋の邊は地が低いので、愛鷹山に隱れて富士の姿が見えない。富士隱といふ名もありとか、駿州の中て富士が見えないとは何たる不幸ぞ。諺にいふ燈臺本暗しの反對を行つたやうなものか。東京でも富士見町、元富士町、駿河町はもとより、到る處此の峯を望み得られるが、駿州に入つて、其の麓から仰ぎ見れば、眞に扶桑第一の名山といふ感を起さしめる。或小學校の尋常一年生に「美しいもの」といふ題で、答案を求めた所、富士山と答へたものが數人あつた。これは先生が教へたのては無い。此の名山の姿が、自然に子供の美觀を動かしたのである。奈良朝の歌人山部赤人は此處に旅行して、千古の名吟を殘したが、[illegible]安城の深宮に形管を弄んだ女流文學者などは、遂に此の壯大な美觀を見ることが出來なかつた。枕草子の「美しいもの」は遂に小學校の尋常一年生にも及ばぬものである。

伊勢物語には、「其の山はこゝに譬へば比叡の山を二十ばかり重ね上げたらん程して、形は鹽尻のやうになんありける」とある。何たるつまらぬ形容ぞや。

一八　富士の詩歌

赤人の短歌は百人一首に採られて、誰知らぬ者は無い。居ながらの名所となつて、歴代の歌人の吟詠は歴代の勅撰集に遺つて居る。併し煙によそへて人を戀ふる類の歌、一つも此の名山に相應しいものは無い。西行法師の歌にさへ、

風になびく富士の煙の空に消えて
行方も知らぬ我が思かな

などつまらぬものがある。後世の歌人は流石に之を國家の標示と歌ふ。

立ちならぶ山こそなけれ秋津洲
我が日の本の富士の高根は

源光圀

賀茂眞淵には望二富士山一長歌が幾首もある。其の中の一の反歌に、

駿河なる富士の高根は雷の
音する雲の上にこそ居れ

契沖には富士百首もある。

富士の嶺は山の王にて高御座
空にかけたる雪のきぬがさ

詩人石川丈山が雪如二紈素一煙如レ柄。白扇倒懸東海天と歌つたのも唯一寸した思付で雄大な想は無い。それよりも余が好きなのは五山僧義堂が人を送る詩に、

富士千仞雪峻嶒。幾度思レ登病未レ能。
送汝錫飛三伏裏。歸來分レ我一壺氷。

惺窩以來の漢學者富士山の作の無ものは一人もない。玲瓏八朶千秋雪と歌ひ、上帝高居白玉臺と歌ふ。皆大同小異、到底此の名山を壓する程のものは見當ら

ぬ。秋山玉山の、

帝掬崑崙雪。置之扶桑東。
突兀五千仞。芙蓉挿碧空。

といふのは高名な詩で、雄大な趣もあるが、日本が崑崙の出店となる思想は、どうしても漢學者である。明の宋景濂、詹億などの富士山の詩もあるが、徐福や羽衣を歌つたばかり、古くから支那まで聞えた名山であるが、詩人の句はどうしても此の山には勝てぬのである。琉球人の歌に、

人間はゞ如何語らん言の葉も
及ばぬ富士の雪の曙

富士に關する詩歌等を集めたら、優に千頁以上の大冊子が出來やう。余は赤人の歌の外には、

心あての雲間はなほも麓にて
おもはぬ方に晴るゝ富士の根　大菅中養父

俳句では、

元日の見る物にせん富士の山
富士晴れて春風さわぐ戸口かな　宗鑑
　　香吹

を愛誦する。

一九　富士の宛字

富士の宛字

富士と書くのが普通であるが、古書には色々に書いてある。

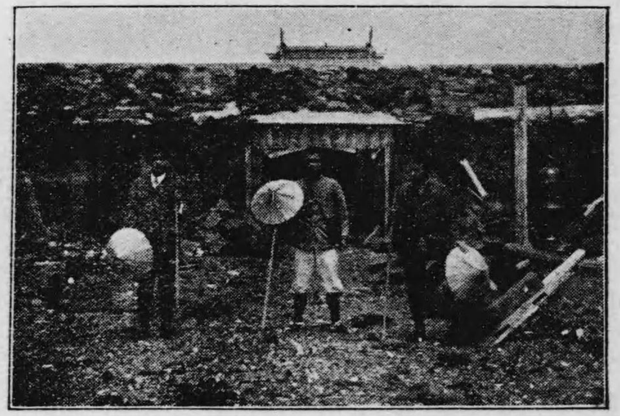
(1)布士　(2)不盡　(3)布自　(4)富岐　(5)富慈
(6)不二　(7)分地　(8)粉陣　(9)富智　(10)風士
(11)福智　(12)風詩　(13)不死

地や智や陣を書くのは、昔風の假名遣からいへば假名違てある。

二〇　富士の異名

(1)藤嶽　(2)鳴澤高根　(3)塵山　(4)常磐山
(5)二十山　(6)三重山　(7)新山　(8)見出山
(9)三上山　(10)神路山　(11)甲斐が根

詩で芙蓉峯といふのは八葉の蓮華に似て居るといふので、詩人は富峯、士峯、芙峯、蓮峯などと作る。歌の詞で、



富士登山

(1)時知らぬ山　(2)消えせぬ雪
(3)根二つなき嶺　(4)老いせぬ山
(5)よもぎふ山　(6)大雪山
(7)千早ふる大根山

などといふのは、皆富士の事てある。

二一　火の山

フジはアイノ語て火の義てあるといふ。壯麗雄偉な芙蓉峯は即ち火の山てある。孝靈五年一夜に湧出たといふ傳說も、火山と考へれば怪しむに足らぬ。萬葉集の歌に、

もゆる火を雪もて消ち、降る雪を火もて消ち

とあるのを見れば、其の頃は活火山であつたに相違ない。

吾妹子に逢ふよしをなみ駿河なる
富士の高根のもえつゝかあらむ

といふのを始として、いつも胸の燃ゆる事に譬へてよんで居るのは即ち活火山たる證據である。古今集の序文には煙が絶えたとあり、平安朝の末の更科日記には夕暮には火が燃え立つて見えるといひ、鎌倉時代の十六夜日記には朝夕たしかに見えた煙がいつの年からか絶えたと書いて居る。歴史で見れば光仁天皇の天應元年、桓武天皇の延暦十九

富士三十六景　北斎

年、嵯峨天皇の貞觀六年等何れも灰を降らし、火を噴出した事が知られる。近いのは寶永年間の大噴火で、遂に寶永山といふ瘤が出來た。今は靜まり返つて居るが、いつ何時、また爆裂するかも知れぬ。天地正大の氣が秀でゝ不二の嶽となつたものならば、其の正大の氣は常に燃え立つ活力を貯へて居るのである。

二二　かぐや姫

「つはものどもあまた具して山へのぼりけるよりなん、其の山をふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へ立昇るとぞ言傳へたる。」

と竹取物語に書いたのを見ると、竹取物語を作つた時代には活火山であつたのである。竹の中から生れ出た美しいかぐや姫、實は月中の女で、それがしばらく人間に養はれて人となり、天皇のお召をも辭退して天上に歸るといふ思想は、支那印度の傳説から導かれたのであらうが、山の名から不死の藥を思出して、

富士山の頂上でこの藥を燃したといふ着想は中々面白いではないか。此の物語が本で、かぐや姫は全く駿河の傳説となつて、後には鶯姫と名が變つた。謠曲の富士山にもある。

二三　人穴

富士山には人穴があつて其の深さは際限が無いといふ。仁田四郎忠常が之を探檢にいつた事はチャンと正しい史籍に載つて居る。今でいへば南極探檢程に考へたのであらう。東鑑に建久三年六月、

到二富士麓一有二巖穴一。未二曾有一知二其深限者一。

俗呼曰二人穴一。使二仁田四郎忠常探二入之一。

忠常が一日一夜を過して歸つての話に、洞の中は狹くして、僅に一人の通路である。暗さは暗し、松明をかざして行く路は、水流れて足をひたす。幾らといふ數限なき蝙蝠は、火の光に恐れて、飛翔つて行手を遮る。中には白い蝙蝠もある。水の流に沿うて、小い蛇は足のあたりに纏ひ付くのを、刀を拔いて切放し、切放し行く。或は腥い風が吹いて來て、嘔吐を催すこともあり、或は香ばしい薫がして、涼しく成ることもある。青い氷柱のやうなものがある。それは鐘乳といふものである。時には千人ばかり一同に鯨波を作るやうな聲もする。四方黑闇々たる中に人の泣く聲も聞える。尙進んで行くと大きな河がある。流は矢の如く早く、冷きことは極寒の氷のやうである。川向は七八十間もあつて、松明のやうな光が遙に見える。四人の家來はこゝに倒れて死に、忠常一人命助り還つて來たとの事。尤もらしくもあり、うそらしい所もある。

二四　卷狩

仁田四郎で思出すのは富士の卷狩である。鎌倉將軍では度々狩獵の遊があつ

たが、中に著しいのは建久四年五月東八ケ國の侍を呼集めての卷狩、曾我兄弟が胸の煙を富士の颪にはらして、月を清見が關に名

を留めた本懷、末代までの語草となつた事は、くど〳〵しく言ふには及ばぬ。

二五　鳴澤

富士の峰の鳴澤では常に雷のやうな音がしたといふ。噴火の音であつたのかも知れぬ。萬葉集に、

戀ふらくは富士の高嶺の鳴澤の如とあるのが本で多く歌に詠まれた名所である。それを藤原俊成卿（定家の父）が、

五月雨は高嶺も雲の中にして
なるさは富士のしるしなりけり

と詠んだので、なるさでは語を成さぬ。なるさの入道と綽名されてくやしがつたといふ話がある。漢文で書いた都良香の富士山記よりも、俳文の嵐蘭の富士

東海道五十三次

山賦、すべて富士山の古事や奇聞を綴つて面白いものである。

二六　腹を立つ

東海道中で海道一の美觀を見ぬのは何よりの遺憾である。昔からの紀行で、富士を見ないうらみを述べたのも澤山あるが、中にもをかしいのは八田知紀の白雲日記、やさしい雅文の筆づかひに滑稽を交へて、

「二十三日猶雨の心つらければいと腹立たしくて原を立つ。

あやにくに晴れぬ雨かな天のはら

神のはらさへかはりはてけん」

二七　富士川

雄偉な富士山に對して同じ名を負ふ富士川は川として其の名稱を辱しめぬ。

腹を立つ　富士川

東海道には馬入、大井、天龍等の大河も多いが、海道第一の急流といはれるのは此の川である。風伯雨師のあらびには、鐵路の往復をさへ杜絶せしめる。況してむかしの旅路、數日を重ねての川止は、どれ程の難儀であつたらう。

昨日やう〳〵安倍川を渡りてけふ又川水の水嵩に止められぬるいとぶせし。

と冷泉爲村の東紀行の文を見るにつけても、川柳子の、

川止にてにはを直す旅日記

を想出さずには居られぬ。

三日目は川ばたまでも行く氣なり

逗留の退屈嘸かしと思はれる。此の天嶮を夾んでの源平の對陣、齋藤別當實盛の一言に脅かされて、水鳥の羽音に驚き立つた平家の七萬餘騎、あまりに小說らしく見えるが、東鑑等に記してあるから、事實に相違あるまい。壇浦は悲慘

であるが、これは滑稽である。

富士川の瀨々の岩越す水よりも
早くも落つる伊勢平氏かな

二八　田子の浦

山部赤人の歌で知られた田子の浦は、三保の入江から浮島が原づたひの浦を一體にいふので、淸見、沖津などは、其の中の小名だといふ。此の一帶の浦づたひは實に山海の名勝を一眸に集めて、海道第一風景明媚の處である。瀧車旅行に疲れた人も必ず窓に倚つて海風を容れる所である。昔からの紀行文も、一として此處の景色を賞めぬものは無い。岫崎といふあたり、巖石多き道を浪間を覗ひて走り行くので、昔は親不知、子不知の名もあつたのである。其の後は

薩埵峠の道も出來た。今はトンネルの出入に瀘車の窓の開閉の忙しい所である。古歌に名高い來ぬ見の濱は興津あたりの海岸をいふ。清見の浦、清見潟、如何にも美しい地名である。光行の海道記に、

清見が關を見れば、西南は天と海と高低一つに眼を惑はし、東北は山と磯と嶮難同じく足をつまだつ。巖の下には波の花風に開く春の定なく、峯の上には松の色綠を含みて秋を恐れず。浮天の波は雲を汀にて、月のみふね夜出て漕ぎ、沈陸の磯は磐を道にて風の使脚あしたに吹きて過ぐ。名を得たる所必ずしも興を得ず、耳に耽るところ、必ずしも目にふけらず。耳目の感二つながら得るは此の浦に在り。

十六夜日記に、岩の上越す白波を見て、

暮かゝる程清見が關を過ぐ。岩越す浪の白き絹をうち着するやうに見ゆるいとをかし。

と白絹に譬へたのは流石に、女人の筆である。「夜の宿なまぐさし」といひ、「風いとあれて、浪多く枕の上に立騒ぐ」といふ、此の頃の漁村の有樣さこそと首肯かれる。行くも歸るも旅人の心殘して、いつまでも忘れかねる好風景である。

清見潟關とは知らで行く人も
心ばかりはとゞめおくらん　（源光行）

二九　驛路の鈴

此の風景畫のやうな地も、修羅の巷となつて鮮血の路の邊の草を染めた事は太平記に詳しい。時は觀應二年十一月將軍尊氏弟直義入道を誅伐すべき宣旨蒙つて薩陀山に陣を張る。寄手五十萬騎散々に敗北して直義も遂に降人とな

つた。亂臣兄弟の爭、醜の極である。物あはれな武人の話は、それよりもずつと昔、朱雀天皇天慶の亂に、民部卿忠文、征討使として東下して此の關に泊つた。清原滋藤といふもの、軍監といふ官で陣中に在つたが、

漁舟火影寒燒浪。　驛路鈴聲夜過山。

といふ句を誦したので、忠文卿も涙を流したといふ。

三〇　清見寺

山といはず、海といはず、美しい形勝の地は浮屠の徒がいちはやく占領して居る。清見寺は山を負ひ、海に臨んで山門の前は直に東海道の本道、昔の清見が關は此のあたりにあつたらしい。此の天地秀麗の境に居て、波の色、月の光に心を磨けば、如何なる凡骨も心耳の朗かなるを覺えるのである。

「あら面白の鐘の音やな。我故郷にては清見寺の鐘をこそ聞馴れしに、これは又さゝ波や三井の古寺、鐘はあれど昔にかへる聲は聞えず、

と謠曲の三井寺に作つた清見が關の狂女、鐘の音を緣に親子の再會を脚色んだ曲で、一は海岸、一は湖邊、名所多き鐘の音、自ら眞如の月の澄む影を感得させる意味であらう。

三一　鮹和尚

此の寺の開基關聖禪師、仇名を鮹和尚といつた由來は、清見が浦の漁夫一丈餘の大鮹を捕へて、煮て喰はうとした處へ、和尚來かゝつて、價を償うて買求め、法語を授けて放ちやると、鮹は忽ち蘇つて、頭を振立て光を放つて、海中へ泳ぎ返つたといふ。蟹を救つた話、龜を救つた話は古くからあるが、これ

は鮹であるだけに面白い。

三二　天の羽衣

世に知らぬながめなればや天人の
天降りにし三保の松原

げに人界とも見えぬ此の美しい風光には、天人の天降るといふ想像も無理ならぬ事である。そも〳〵天女が天降つて水中に浴し、其の羽衣を奪はれて、遂に人間界に止るといふ古傳説は、世界各國どこにもあるので、傳説學者は之を白鳥處女式の傳説と唱へて居る。日本の古風土記でも、比治山と餘吾の海と同じやうな話を傳へて居り、又常陸古風土記にも天女の鳥となつて下る事がある。外の國のはいざ知らず、駿河の三保の浦の風色、遙に豆相の峯巒連疊せる上に、

八面玲瓏の富士の山が聳え、青松一帶の三保の松原の伸び出てた海面、天女の來り降るのには最もふさはしい背景である。

我三保の松原にあがり、浦の景色を眺むる所に、虚空に花降り、音樂聞え、靈香四方に薫ず。これ唯事と思はぬ所に、これなる松にうつくしき衣かゝれり。

天の羽衣

三保の松

と少し佛經めいた所は却つて俗になつて居るが、

浦風にたなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のあしたか山や、富士の高嶺、かすかになりて、天つ御空の霞にまぎれてうせにけり。

縹渺たる有樣何たる氣韻ぞや「むかし天少女の衣を懸けし松今は枯れて跡ばかりあり」と池田新太郎少將の丁未旅行記には記して居る。

三三　靜岡

昔の國府が今もその儘縣廳の所在地。繁華な都會となつて居るのは珍しい。今川氏や德川氏の根據地であつた事も知らぬ人はあるまい。賤機山、名もうるはしい山で、古歌の詠も少くない。

三四　燈閣數行虞氏淚

靜岡の西を流れる安倍川も難義な川の一つで、古名藁科川。東川端の彌勒茶屋名物安倍川餅の名は全國に擴がつて、誰も知らぬ人は無い。其の西岸の地はむかしの手越の驛で、光行の海道記にも「手越の宿に止りて足を休む」とある。十六夜日記にも「今宵手越といふ處にとまる」とある。三位中將重衡が東國に囚れの身となつて、此の宿に來た時、賴朝は千手の前といふ女を遣して旅情を慰めさせた。

「夜もやう〳〵更けて、心の澄むまゝに、あな思はずや東にもかゝる優なる

靜岡　燈閣數行虞氏淚

人の有りけるよ。それ、何事にても今一聲と宣へば、千手の前重ねて一樹の陰に宿りあひ、同じ流を掬ぶも皆是前の世の契といふ歌を諷うたりければ、三位中將も燈闇うしては數行虞氏涙といふ朗詠をぞせられける」

「燈闇數行虞氏涙。夜深四面楚歌聲」項王の末路を身に引きくらべて、此の朗詠を口吟した重衡の感懷は如何であつたか。中將は曾て平相國の命によつて南都を燒拂つた爲、命乞も聽かれずして、遂に南都に渡されて斬られた。千手の前は之を聞いて濃い墨染の袖に隱れて、信濃國善光寺に行ひ澄ましたといふ。曾我十郎の虎、源義經の靜、白拍子の賤しい女子にも

あはれな貞節の話は多い。

三五　吐月峰

連歌師紫屋軒宗長の墓は丸子の西口、天柱山紫屋寺といふ禪寺に在る。即ち宗長が隱栖の跡である。よし宗長の名は知らぬでも、吐月峰の名を知らぬ人はあるまい。煙草盆の灰吹には必ず吐月峰の燒印がある。これは吐月峰の竹であるといふ銘である。

三六　うつの山

丸子川を越えて、伊勢物語の昔から名高い宇津の山。鐵道の出來る前から人道のトンネルも出來て居た。はる〳〵の東路の旅、蔦の細道で修行者に逢つて、

駿河なるうつの山べのうつゝにも

吐月峰　うつの山

夢にも人にあはぬなりけり　（伊勢物語）

十六夜日記に、

「宇津の山越ゆる程にしても、阿闍梨の見知りたる山伏に行逢ひたり。夢にも人をなど昔をわざと學びたらん心地していとめづらかにをかし。」

とあるが、此の度も山伏に逢つたのは如何にも不思議である。それにつけて文を京都へ託しやる當時の不便は、今から思へば眞にうつの山の夢うつゝのやうな事柄である。風流中將の昔を戀ひて歌人の詠んだ歌は數限りも無く多い。

いづれも旅のあはれ、昔おもふ情を叙べて居る。林羅山は、

今古冥々名與レ境。　業平歌後更無人。

と吟じたが、俳人許六の、

十團子も小粒になりぬ秋の風

は千古の絶唱であらう。

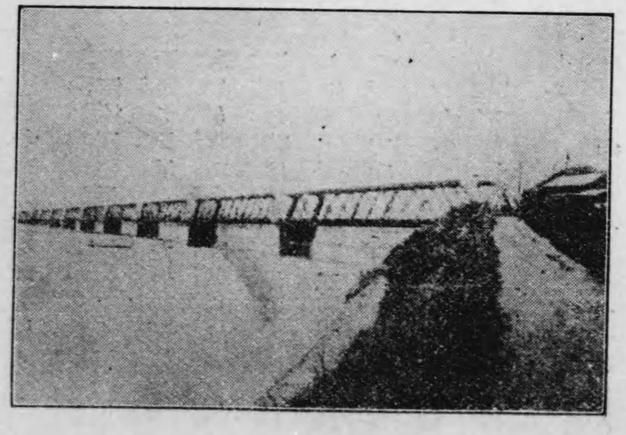
三七　大井川

駿河遠江の境を流れる大河。蓮臺肩車で川越をした昔の面影は古錦繪より外に今日は見られぬ。例の川止の時は兩岸の島田、金谷はいふに及ばず、一驛二驛も後へ戻つて水の減るのを待つたといふ。島田、金谷の兩驛に居た渡丁は七百人以上もあつたさうてある。膝栗毛を見ると、彌次郎が十團子の茶屋近くの阪路ですべつてころん

で、「降りしきる雨や霰の十團子ころげて腰をうつの山路」と洒落ながら、岡部へ來る。

岡部の客引待ち受けて「お泊りて御座いますか。彌「イヤわつちらアけふ川を越さにやアならねエ。宿引「大井川は止りました。北「南無三川がつかいやしたか。宿引「左様で御座います。さきへ御出なさつても、お大名が五かしら、島田と藤枝にお泊りでございますから、あなた方のお宿は御座りませぬ。先岡部へ御泊りなさ

大井川鐵橋



いませ。彌「そんならさうしようか。北「お前何屋だ。宿引「相良屋と申します。すぐにお供致しませう。

此の問答でよく其の様子が思はれる。さて又川越の體たらくは、

川「旦那衆川をたのんます。彌「貴様川越か。二人でいくらで越す。川「ハイ今朝がけに明いた川だんで、肩車ぢやアあぶんない。蓮臺でやらすに、お二人で八百下さいませ。彌「十方もねエ越後新潟ぢやあんめエし。八百よこせもすさまじい。川「すんだらいくら下さるヤア。彌「いくらも櫺木もいらねエ。おいらがぢきに越すは。川「オヽ川流や二百附けて寺へやるから、なんなら、さうさつしやい。流れた方が安くあがらア。アハヽ。

と問答の末、侍の眞似をしてしくじり、やがて蓮臺に乘つて、

蓮臺に乘りしはけつく地獄にて
下りたところがほんの極樂

大井川

三八　菊川

鎌倉時代には可なりの驛であつたらしい菊川の宿、承久の時、前中納言宗行が鎌倉へ護送される途中、此の驛に宿つて、家の柱に、

昔南陽縣之菊水。汲二下流一而延レ齢。
今東海道之菊川。宿二西岸一而亡レ命。

と書いたのは物あはれな話である。後醍醐天皇の御世再び鎌倉退治の御企があつて、藤原俊基朝臣が同じ樣な運命で復この宿に來り、

いにしへもかゝるためしを菊川の
同じ流れに身をや沈めん

と吟んだのは、更にあはれな物語を重ねたといつてよろしい。若しこれ等の書殘した句が今日まで殘つて居たならば、旅人の感懷は嘸かしとおもふ。希臘羅

馬の古都の遺物は隨分昔の儘に殘つて居るのもあるが、木造建築物の悲しさ。かういふ紀念物は唯書物に殘るばかり。今日我等が見得ぬばかりでは無い。俊基朝臣の時すら宗行の書置は最早無かつたのである。宗行が句を題したといふ承久三年から二十二年目の東關記行に、「あはれにもその家を尋ぬるに、火の爲に燒けてかの言の葉も殘らぬ由申すものあり。今はの限とて殘し置きけん形見さへ跡なく成りにけるこそ、はかなき世の習いとど哀に悲しけれ。」

三九　夜泣石

年たけてまた越ゆべしとおもひきや
命なりけり小夜の中山

と西行の歌に名高い小夜中山は東海道の嶮路の一つである。鐵道の金谷驛を離れると、直ぐに佐夜中山のトンネルにはいる。恐くは東海道中の最長トンネル

てあらう。尤も今の鐵道は中山よりは南の方を通るのである。舊道の峠路を越えれば、必ず夜泣石の由來を聞くであらう。昔日坂の驛に女があつて、此の山坂を越えて金谷驛に居る夫の許へ通つた。或夜强盜に逢つて遂に其の毒手に倒れたが、日頃信仰の觀音が現れ出て、此の女の胎内から赤ん坊を取出し、あたりの賤の女に預け、飴を以て養育せられたといふ。さてその赤ん坊が段段成長して、口癖の樣に「命なりけり小夜の中山」と言つて居たが、後遂に池田の宿で、其の强盜にめぐり會ひ、首尾克く母親の敵を討つたとの傳說である。

る。觀音の慈悲と西行の名歌と、日本名物の讎討とが結付いて、どこから見ても近世的印象のあらはれて居る話である。續太平記永享四年將軍義敎富士遊覽の時、已に昔話として傳へてあれば、隨分古い話である。昔の駿河風土記に、手兒の呼坂といふ傳說がある。これは庵原來ぬ見の灣に女神があつて、岩木の山の此方に來て、毎夜男神を待つて、男の神の名を呼んだといふ話である。小夜中山の女が金谷の夫の許へ通ふといふのは此の傳說が本てはあるまいかと思ふ。三保の松原のやうな風光明媚な地には天女の羽衣が降り下るし、佐夜中山の樣な難義な山坂には、强盜の追剝があらはれる。處によつて色々な傳說のあるのは、處によつてそれ〳〵の名物があるやうなものである。

四〇　わらび餅

小夜中山の長い峠路を下つて、日坂のわらび餅に足の勞を休める。わらび餅

といふ名ではあるが、實は葛の餅だといふこと。川柳子はそれを知らぬと見えて、

日坂は喰べられぬのを繩に綯ひ

四一　無間の鐘

日坂の東北二里許に粟が嶽といふ山があつて、こゝに無間山觀音寺といふお寺がある。このお寺に無間の鐘がある。此の鐘を撞けば現世にては無量の財寶を得られるが、死んでからは無間地獄に落ちるといふ。かの梅が枝の手水鉢の話の本である。此の鐘がもし今の世に有つたなら、隨分撞きに行く人が多からうと思ふ。

四二　事のまゝ

無間の地獄よりも祈る驗のありさうな名の社は日坂の八幡、事任（コトノマヽ）の社である。清少納言の枕草子にも、

ことのまゝの明神いとたのもし。さのみきゝけんとやいはれ給はんとおもふぞいとをかしき。

とある。昔は名高い神社で、遠江國の一の宮であつた。

ゆふだすきかけてぞたのむ今おもふ
事のまゝなる神のしるしを

みしめなは神にまかせて一すぢに
我がおもふ事のまゝにいのらん

など古歌は中々多い。

四三　櫻が池

中泉の南の方一里許の櫻が池には、昔源皇といふ阿闍梨が龍となつてはいつたといふ傳説がある。源皇は法然上人の弟子で、かねて思ふには、最も長壽なものは龍である。龍となつて彌勒の世に出て給ふ時を待ちたいと。やがて入寂の當日にはこの池の水が大に騒いで波立つたので、すはこそ阿闍梨が龍身を得られたと噂したといふ。其の後師の法然上人が、此の池の端へ來られて龍身の阿闍梨と問答せられたといふ話さへある。

四四　熊野

「熊野松風に米の飯」といはれて、謠曲で知らぬものも無い熊野の故郷は遠州池田の宿である。平家物語重衡東下りに、

濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江に噪ぐ波の音、さらでも旅は物憂きに、心を盡す夕まぐれ池田の宿にも着き給ひぬ。かの宿の長者熊野

が女侍從の許に、其の夜は三位宿せられたり。侍從三位中將殿を見奉りて、日頃はつてにだに思召し寄り給はぬ人の今日はかゝる所へ入らせ給ふ事の不思議さよと、一首の歌を奉る。

旅の空はにふの小屋のいぶせさに
故郷如何に戀しかるらん　熊野侍從

ふるさとは戀しくもなし旅の空
都もつひのすみかならねば　三位中將

やゝありて中將梶原を召して、さても唯今の歌の主は如何なるものぞ。やさしくも仕りたるものかなと宣へば景時畏つて申しけるは、君は未だ知ろしめされ候はずや、あれこ

そ八島大臣殿の未だ當國の守にて渡らせ給ひし時、召され參らせて御最愛候ひしに、老母故郷にて痛あれば、都より御暇を申上げしかども、給はらざれば、頃は彌生の初にやありけん、

いかにせん都の春もをしけれど
なれし吾妻の花や散るらん

といふ名歌仕り、暇を給はりて罷り下り候ひし海道一の美人とぞ申しける。

とあつて、由來は明かに分る。都人の三位中將が此の話を知らないで、梶原景時が說明するのも面白い。梶原といへば誰も惡い奴、憎い人のやうに思ふが、元來中々風流の才のあつた男である。池田の宿、今は天龍川の東岸の一小村であるが、昔は川の西岸にあつて、大きな驛亭であつた。川の瀨が變じたのだといふが、天然も人事も兩ながら時劫の變遷を免れない。

四五　天龍川

大井川、富士川、安倍川等の本流の名稱に引替へて、これは又天龍の名を聞くだけでも、威勢のよい大河である。歌人は和らげて天の中川といふ。氣の毒なのは西行法師で、こゝの渡船に乘込んだところ、最早場所は無い。下りよ下りよと鞭を似て叩かれ、頭から血がだら〳〵。止むを得ず、船から下りた。昔の旅の難澁思ひやられる。阿佛尼も之を思ひ出して「西行の昔思ひ出でられていと心細し」と同情して居る。勇ましいのは、新田義貞が船田入道と抱合つて、浮橋の二間ばかりも落ちた所を飛び渡つたことである。浮橋といへば、船橋のやうなものであらう。義貞が此の時の戰に架橋したのである。昔の戰爭にも、工兵の大作業はあつた。

四六　女武者

今は人口二萬餘の濱松町、徳川家康の在城として、武田氏と攻合つたのはこである。城趾は町の北方にあつて、古城と新城とある。古城は引間の城で、新城は家康の修築したもの。永祿の頃引間の城には飯尾豐前守致實が居つたが、此の人徳川氏に内通したとあつて、今川氏眞の怒に觸れ、欺し討にせられた。致實の妻、女ながらも憤慨に堪へず、堅く籠城と決心した。徳川氏からは、その城を渡せ、さらば飯尾の子供はもとより、家人等も悉く召抱へて扶助してやらうとの沙汰があつたが、妻はどうしても承知しない。徳川方でも、さらば其の城を乘取れとて攻寄せたが、かの妻城兵を指揮して防戰怠らず、寄手はげしく攻立てゝ、外廓に乘込んだ時、妻は緋縅の鎧に同じ毛の兜を着、長刀を揮つて敵中に斬つて入る。侍女七八人、同じ裝に出立つて、郎從五六十人と奮戰し

て、男女一人も殘らず討死した。天晴武士道の意氣地。武勇は巴板額にも劣らず、節操は細川氏夫人にも優つて居る。この引間の城趾を擴張し、新城を築き、さて引間の名は面白くないと、濱松と改名したのである。

四七　賀茂眞淵

濱松の南に淺田村といふ處がある。此處は中古岡部の郷といつて、賀茂の社領であつた。國學の大家賀茂眞淵は此の社人の末で、岡部氏を名乘つて岡部衛士ともいつた。若い頃濱松の旅店梅屋といふ家へ養子に行つたが、後京都に上つて、荷田春滿の門に入り、江戸に出て、古學を主張したのである。眞淵が久しぶりで古郷へ歸つた時の日記に、

暮過ぐる程岡部の家に至る。まことに門によりて待受け給ふ。幼なき姪どもなど馳せ來れども、見知らぬ顔なればにやあらん、とみにも睦れず。…妻

なる人は容易く來べからぬ故あれば先づ子をおこせたるに、年頃經て見るに、おとづけにたるぞ嬉しき。

と故舊親戚に逢つた喜を叙べて居るが、又其の後の日記には母の死んだのを悲しんで、

さて岡部の家に行きて父母のしるしを拜むに、今年正月廿三日になん母は失せ給ひにければ、まだおはさぬものとも覺えぬを、供へ物の具ども白くてあるを見るも、涙の進みてよゝと泣かる。去年の冬參り來ざりし怠を、悔の八千度思ふもかひなし。御墓に詣でゝ、

野邊の露消えせぬ程に訪はざりし
我が身の罪ぞおき所なき

と申すを唯松の秋風の應ふる聲をのみ聞きて歸りぬ。

さて再び都へ上る時また母の墓に參つて、

泣く〳〵も別れし時をわかれにて
別るゝ親の無きぞ悲しき

四八　三方原

濱松近郊の引馬野は萬葉集に、

引馬野にほふ榛原入り亂れ
衣にほはせ旅のしるしに

の歌で知られて居る。その引馬野の北方一帶は德川氏の苦戰した三方原である。時は元龜三年十二月二十二日武田信玄の軍勢は四萬三千餘騎、家康は八千の兵を引いて濱松を打つて出たが、折しも降りしきる大雪、濱松勢は總敗軍で、究竟の勇士は三百餘人も討死し、信長からの援兵も一戰に及ばず逃げ落ちた。

濱名湖

四九　濱名の橋

遠江といふ國名は近江に對しての名である。アンミは淡海の義卽ち湖水である。京都に近い琵琶湖のある國が近江國で京都に遠い濱名湖のある國がトホツアフミ卽ち遠江國である。此の濱名湖が後土御門天皇の御世とかや。大地震の爲に、遂に海と續いて仕舞つた。今切といふ地名はそれから起つたのである。玆に面白いのは山の中から多くの法螺の貝が拔け出して、海へは

いつて、其の跡が海になつたといふ話である。これこそ本當の法螺話と言つてもよからう。昔湖水であつた時は其の水が海へ流れ落ちる所に橋が架つて居た。和歌に有名な濱名の橋である。

白波の立渡るとも見ゆるかな
濱名の橋に降れる白雪　前齊院尾張

朝日うけ濱名の橋のとだえして
霞と渡る春の旅人　衣笠内大臣

霧はるゝ濱名の橋の絶え〳〵に
あらはれわたる松の村立　藤原定家

更科日記には「下りし時には黑木を渡したりしに、此の度上りしには黑木だに無し。舟にてぞ渡る」とあつて、其の頃は橋は無かつたのである。然るに十六夜日記には「濱名の橋より見渡せば」とあるから、其頃には又出來たのであら

う。すべて此のあたりの景色は興津近傍と相並んで、海道中の好風景である。昔からの紀行文には、いづれも其の風光を賞め稱へて居る。今切となつてからは東舞坂から西荒井まで船渡し。舊幕時代には荒井に番所があつて旅人を檢めた。今は鐵道の食堂列車で、この風景を賞しながら食事をするのである。

五〇　汐見阪

七十五里の遠州灘を見はるかして一望快濶。これ其の名の起る所以。晴れた日には富士も見える。足利義教永享四年に、

今ははや願も滿ちぬ潮見阪
心ひかれし富士もながめて

五一　窟觀音

大岩山といふ岩だらけの山。觀音堂があつて窟觀音といふ。堂の下の大巖は高さ八丈、幅が二十餘丈で、形が龜に似て居る。今汽車の窓から望まれる。

堯孝の歌に、

君が代は數も知られずさゞれ石の
みな大岩の山となるまで

五二　豐橋

古くは今橋、それから吉田、明治維新後は豐橋。よく地名の變る所である。歩兵第十八聯隊は舊吉田城の中にある。德川氏がまだ微弱の頃重な家臣等は人質を今川氏へ出して置いた。今川の家來小原肥前守鎮實この城に居て人質を預つて居たが、其の後不和になつた時德川方の人質十一人をこの城外で串刺にしたといふ。殘酷な話では無いか。

五三　狐の嫁入

豐川稻荷といへば三河一國はおろか、日本中に名の響いたお稻荷樣で、參詣の群集は豐川鐵道を拵へさせた程の勢力である。併し此の繁昌も百五十年來の事で、以前は牛久保町の西島の稻荷の方が繁昌であつたさうだ。寶曆年間に西島の稻荷から、豐川の平八狐の所へ婿入したので、其の以後西島はさつぱり流行らず、人氣はすつかり豐川へ取られたのだといふ。

五四　三河聖

俗名は大江定基、さすがは江家の出で文章を善くした。父祖の功勞で藏人に補せられ、後三河守になつて任所へ下つた。此の頃赤阪の長者の許に力壽といふ美人が居た。定基は深く之と契つて、不都合にも年來の妻を追出した。間もなく力壽が病死したので、定基は悲歎の涙にくれて、忽ち厭世の心を發した。その時、鏡を賣りに來たものがある。匣を開けて見ると、一首の歌、

今日までと見るに涙のます鏡
馴れにし影を人に語るな

之を見て益遁世の志を起し、永延二年、遂に薙髮して寂心の弟子となつて、寂照と改名した。さて托鉢して食を乞ひ歩いたが、一日もと追出した妻の家とも知らず、門口に立つた。妻は食物を與へながら、散々に嘲り笑つたが、寂照は平氣で貰つて食つた。それから一人の母親の許を得て支那へ渡り、宋の天子からは圓通大師の號をさへ賜はつた。後支那語にも通じ、戒律を守ること極めて嚴重で、支那の道俗歸依するものが甚だ多かつた。かくて長元七年宋の國で入寂した。之を光行の海道記に、

妾は良人に先だちて世を早うし、良人は妾に後れて家を出づ、知らず利生の

菩薩の化現して夫を尋ねけるか。又知らず圓通大師の發心して妾を救へるか。互の善知識。大なる因緣なり。

と書き、親行の東關紀行には、

人の發心する道、その緣一にあらねども、飽かぬ別を惜みし迷の心をしもしるべし。誠の道に赴きけん有り難く覺ゆ。

と書いた。世に云ふ文覺上人の發心と同樣、何事にも熱心な思込みの強い男であつたと見える。

五五　三河萬歲

三河から起つた江戸の將軍家の新年は、三河萬歲に祝はれるのが恒例であつた。將軍家はもとより、今は大名旗本と太平の世を樂んだ家門の春に、故郷の風俗を聞いた愉快さは想像するに餘がある。此の頃東京の正月に歩行く萬歲

は見すぼらしいものである。

五六　矢矧橋

矢矧橋といへば、人は先づ腕白物の日吉丸を想ひ出すであらう。

莚をかぶつて橋の上に駕て居た小童がむつくと起上つ

三河萬歲　矢矧橋

て、蜂須賀小六の刀の鐺をおさへ、其の度膽を拔いたといふ話である。併しこれは全くの作り話であるらしい。古來の英雄豪傑、美人、學者、すべて名のある人物には後世色々の話を附加へる。其の作り話が、如何にも能く其の人物に合ふ樣に出來て居るのがをかしい。豐太閤の小供の頃の話は、十の七八までは作り話であるらしい。日吉丸といふ名さへ後世の作である。建武の昔新田足利がこの矢矧川を夾んで戰つたこと、太平記に見えて居る。矢矧橋は德川時代では、五十三次中第一の長橋として世に名高かつた。

五七　淨瑠璃姫

近世音樂の總稱になつた淨瑠璃といふ名は淨瑠璃十二段草子から出た。その淨瑠璃十二段草子といふのは矢矧の長者の女に淨瑠璃姫といふものがあり、之に源義經が通つたといふ筋を作つたのである。足利時代のものであるから、之

によつて藥師佛の利益を語つた。十二段あるは藥師の十二神將にかたどつたのである。淨瑠璃といふ語も、もとより佛經中の語。平家琵琶から、謠曲をはじめ、說敎祭文に至るまで、近代音樂はすべて佛敎に關係のないものは無い。今も誓願寺とかいふお寺の中に淨瑠璃姫の墓とてあるさうだ。

五八　八つ橋

これは又平安朝物語の鼻祖といはれる伊勢物語の舊蹟。業平が古物語の大立物であることは、義經が近代淨瑠璃の大立物であるのと同樣である。伊勢物語で最も知られて居るのは例の隅田川の都鳥の言問ひ、これは江戸が開けてから、殊に有名になつたのであらう。次には前に述べたうつの山の蔦の細道、それから八ッ橋のかきつばたである。八ッ橋の圖は屏風の繪にも漆器陶器の繪にも衣服の染模樣にも描き出されて、八つ橋といふ菓子さへある。不自由がちな昔の

旅て、在五中將ともいはれる貴人が、かれ飯といつて道明寺糒のやうなものを食ひながら、

からころも きつゝなれにし つましあれば はるゝきぬる たびをしぞおもふ

とかきつばたといふ五文字を頭に置いて詠んだ。それを聞いて同行者も皆涙を流して、かれ飯をぬらしたといふ。今その古蹟といふ所に杜若は無い。ずつと古く鎌倉の世にも早や杜若は無かつたので、光行も「かの草とおぼしきものは無くて、稻のみぞ多く見ゆる」と書いて、

花ゆゑに落ちし涙の形見とや

稻葉の露の殘しおくらん

杜若はあつても無くても頓着しない。歌人は居ながらにして名所を知るので、

かきつばたにほふ川邊の旅衣　家隆

この下影もたちぞやられぬ

關路こえ都戀しき八つ橋に　定家

いとゞへだつる杜若かな

などあるが、一九の彌次郎兵衛も、

八つ橋の古蹟をよむもわれ〳〵が

およばぬはぢをかきつばたかな

五九　名物有松絞

名物有松絞の起源は寛政の頃大阪から來た夫婦のもの、病身で困窮したのを、

おかねといふ十一歳の娘木綿絞を作り出して、夜の目も合はさず精出し、父母を安樂に養つたので、この事がお上に聞えて、おかねが十五歳の時白銀廿枚の御褒美があつたといふ。いはれを聞けば有難い。この木綿絞を身に着る人はおかねの孝心を忘れぬであらう。

六〇　桶狹間

「人間五十年下天のうちを比ぶれば夢幻の如くなり。一度生を享け、滅せぬものゝあるべきか」

と高く誦じた酒宴の中より、いざとばかり打つて出てた。時は永祿三年五月十九日、機を見るに敏なる信長は衆寡の敵せぬを物ともせず、熱田の宮に願書を捧げつゝ、「參詣の間内陣に物の具の音聞えたり。見よ白鷺二羽旗の先に飛行くぞ。神威たのもし、勝軍に極つたり」と、頻りに味方を勵まし〳〵、勝誇つたる

今川陣めがけて押寄せた。佐々隼人正、千秋四郎二人以下究竟の者の討死して、味方のひるむに少しも驚かず、「寡を以て衆を制すとは唯かやうの時を得るのみなり。是天の與ふる時に非ずや」と、降り來る大雨を天の與へと義元の本陣さして打懸れば、油斷大敵駿遠參三國の守として雄名時に轟いた義元も、敢なくこに滅亡を遂げた。信長が威名は之より高く、近畿平定の事業は此の一戰に基づいたのであつた。流石に豐臣秀吉を見拔いた英雄、併し又此の俊爽な所が、遂に本能寺の變を招いた所以である。あはれ義元は唯一株の古松の下、「上總介義元戰死所」一片の石碑を止めたのみである。

六一　鳴海潟

遠くなり近くなるみの濱千鳥
　鳴く音に潮の滿干をぞ知る

桶狹間　鳴海潟

の古歌によつて、この邊の干潟なることを知つて、やす〳〵軍勢を渡したといふ太田道灌の逸話は、古武士に取つては文武兼備の最もよい教訓であつた。

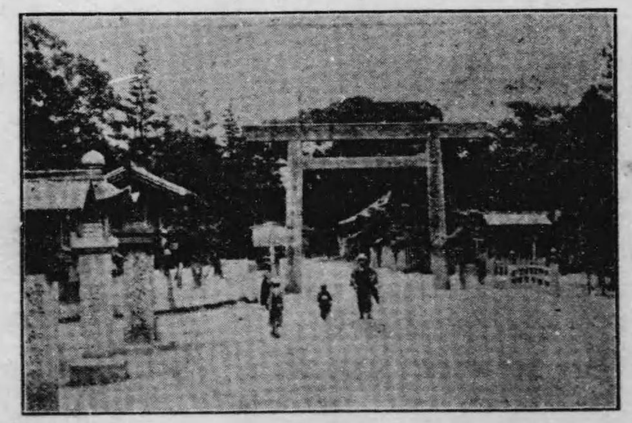
六二　笠寺

天林山笠覆寺、此寺の本尊十一面觀音は笠を被つて居られるので有名である。寺號もそれから出て居る。寺の緣起によれば一旦兵火の爲に諸堂灰燼して、本尊も濡佛になつて居られたが、鳴海の長者の娘、觀音信仰の心厚く常に參詣を缺かさなかつたが、或時の大雨に尊像の雨に浸されるのを悲しみ、自分の笠を取つて着せ參らせた。其の後此の娘立身出世して藤原兼平の北の方となり、醍醐天皇の御世、その由緣によつて本堂は再建せられたといふ。例の觀音靈驗の傳說であるが、娘が自分の笠を佛像に着せたといふ事は、優にやさしい話である。

六三　熱田神宮

熱田は今名古屋に合して名古屋市の一部分になつたが、昔は五十三次の一つ、宮驛である。東海道中第一の尊い御宮、驛の名を單に宮といつたのでも分る。三種神器の一つたる草薙御劍日本武尊を奉祀してあることは苟くも小學讀本を讀んだものならば知つて居る筈。伊勢神宮についで尊い御宮である。今は官幣大社と申す。古い傳說に昔唐の玄宗皇帝が日本を攻取らうとし

熱田神宮



たので、此の神假に楊貴妃とあらはれ、唐の世を亂し給ひ、その計畫を空しうせられた。然るに楊貴妃の馬嵬原で死んだ後、玄宗は貴妃を慕うて、わざ〳〵方士を蓬萊まで尋ねに出した。蓬萊は即ち此の熱田の宮であるといふ言傳がある。隨分馬鹿〳〵しい傳說といはねばならぬ。玄宗が蓬萊山に人を遣はしたといふ話は白樂天の長恨歌にもあつて、人の知つて居る話で、蓬萊の日本であるといふことも、古くから言傳へた話。それに加へて日本武尊が女裝して熊襲梟帥を御征伐になつた事もあるので、かういう話も作られたのであらう。話の形式はやがて其の作られた時代をあらはす。誠に此の話を作つた時代の無學さ馬鹿らしさが分る。もし日本武尊が假に唐の楊貴妃にお生れなさるとすれば、熊襲同樣直に玄宗皇帝を刺殺されるであらうと思ふ。平家物語劍の卷に、新羅王が日本の草薙劍を奪ひ取らうと、生不動といふ將軍に七振の劍を持たせて日本へ渡し、生不動は日本まで攻め來つたが、熱田神宮惡き奴かなと、之を蹴

殺し給うたとある。又新羅の僧道行といふ者は神殿に入りて此の劍を盜み出し筑紫の海を越えようとする時、風雨晦冥此の劍は一帶の黑雲に包まれて、本の舊殿へお戻になつたといふ話もある。いづれにしても、此の宮が靈驗赫灼たる事を信ずる餘から出た物語で、事の外國に關するのも、征討の武功を尊崇し奉る所から起つたのである。併し早く日淸の役で支那を懲し、朝鮮八道悉く日本の版圖に入つた今日から見れば、誠に着眼の點が小さい。國威八紘に輝く今日は益神威のいやちこなのを感ずる。

六四　七里の渡

熱田は今名古屋市の一部分である。名古屋は今日の東海道でも重要な大驛。昔から京都、東國間の最も大事な場處であつた。五十三次は之を通らないで、熱田から桑名まで海上七里の渡し。伊勢物語に、

昔男ありけり。京にありわびて、吾妻に行きけるに、伊勢尾張のあはひの海面にゆく。波のいと白くたつを見て、

いとゞしく過行く方の戀しきに
うらやましくもかへるなみかな

とあるのは即ちこのあたりの海を言つたものであらう。蜀山人の改元紀行に、宮の渡し場に尾州の家士立ちて、艤せる旨を申す。葵の御紋染めたる幕打ちて、四半の幟を立つ、幟の紋は扇を開きたる形なり。篙工六人左右に立ちて船漕ぐめり。實に大船のゆたのたゆたに帆を少し開きに掛けて行く。荒井の船には似もつかず。唯席上に坐せるが如し。春水船如ニ天上坐一と打誦じつつ、横滿藏といへる洲の邊を過ぐれば、堤を修理せる人夫ども多く見ゆ。桑名の城見ゆといふに嬉しく、幕の間より窺ひ見るに、四方の海原霞み渡りて景色言はん方なし。今朝卯の時半に船に乗りしが、辰の半時に桑名に着く。

當時の狀態想ふべしてある。併しこれは特別仕立の船。當時の乗合船は膝栗毛に據れば、一人前四十五文づゝ、其の外駄荷、乗物、皆それ〳〵に賃船を拂ふとある。乗合船とは言ひながら、一人前の四十五文は安倍川渡りの六十五文に比べては、頗る廉いといはねばならぬ。

「酒飲まつせんかいな。「名物蒲燒の燒立て。「團子よいかな。「奈良漬で飯食はつせんかいな。

と口々に呼ばはつた商船の群集。汽車の窓の「ビールに正宗。壽司に辨當」と相似て、興味は稍深いやうに思はれる。

桑名には苦干す宮の時雨かな　山川

六五　名物燒蛤

桑名四日市の間おぶけ、富田あたりの燒蛤は秋から春にかけての名物。冬

の初時雨の頃殊に美味だといふので此の名がある。松かさを焚いて燒くといふのも風流である。蕨餅をはじめとして、名物といへば、とかくに餅の多いのに、これは又一種變つて面白い。其の名も亦頗る風流である。

六六　四日市

何日市と名の付いた場處は全國到る處に多い。筑前陸中の二日市、越中越後の三日市、武藏安藝の五日市、越後石見の六日市、上野、飛驒、羽後の七日市、近江、武藏、下總、飛驒の八日市、大和信濃の十日市、安藝の二十日市など尙其の外にもある。此等は皆昔商賣の市の立つた處で、即ち其の地方の商業の中心地であつたことが分る。伊豆、越後、佐渡にも四日町といふ名があるが、伊勢の四日市と同名の地は東京の中心即ち日本橋中央郵便局のある所であるのも面白い。即ち毎月三回四の日毎に市を開いたのである。今の日本橋の魚

河岸はつまりは其の名殘であらう。東京の四日市は今や世界交通の發起點と發達したが、伊勢の四日市も立派な港となつた。

六七　白鳥陵

四日市に三重川がある。進んで石藥師へ行く路に杖衝坂がある。いづれも日本武尊の御事業をしのばせる地名である。日本武尊東征の歸途足を患み給ひて、疲勞甚しく、杖を衝きて歩み給ふ。これが杖衝坂の謂で、それから尾津崎の一つ松に懸けておかれた御劒を見て、「一つ松あはれ」の歌を詠み給ひ、三重村にお出でになつた時、足は三重のまがりのやうに疲れたと仰せられて、遂に能褒野に薨ぜられたのである。石藥師庄野間に御陵があつて白鳥陵と云ふ。其の緣由は此處に御陵を作つて大和の都から后達皇子等がお下りになつて御哭きなつた所、忽ち、大きな白い鳥が陵から翔り出てた。后達皇子だちは、さては

尊の出てましよと、竹の切株に足の破れるのもお構ひなく、其の白鳥を哭く哭くも追行かれた。白鳥は一旦河内の國の志貴に留つたので、其處に又一つ御陵を作つた。然るに又其處より翔り飛んで今度は天に翔つて分らなくなつた。これは古事記の言傳へてあるが、日本紀によれば能褒野の陵から一度は大和の琴彈原に止まり、二度目には河内國舊市に往つて留つた。即ち能褒野を併せて三箇所の御陵を築かれて、この三つをどれも皆白鳥陵と唱へたのである。

六八　燒米

庄野の名物俵入の燒米は燒蛤にもましてをかしい。元和二年に書いた林羅山の丙辰紀行に已に此の事を載せて、

此所の民家に火米を小さ俵に入れて毎戸並べて置く。其の俵の大きさ拳の如く、又は槌の如くなるものあり。綸子のせいに包み、縛へてあるを旅人

買取りて家苞にすといふ。

とあるのを見れば、隨分に古い名物である。

六九　蝦夷櫻

今の關町は即ち古へ鈴鹿關のあつた故の名である。越前の愛發、美濃の不破と相並んで、三關の一つであつた。

えぞ過ぎぬこれや鈴鹿の關ならん　　藤原定家

ふりすて難き花の影かな

關の井口氏といふ家に蝦夷櫻といふ櫻があると名所圖繪に見えて居るのは、多分この歌のえぞ過ぎぬから來たのであらう。今はあるかどうか知らぬ。

七〇　關の地藏

有名な一休和尚の開眼とて名高い。之が開眼を乞はれた時、一休は、

釋迦は過ぎ彌勒は未だ出でぬ間の
かゝるうき世に目あかしめ地藏

と詠みながら小便をしかけて通つた。里人は大に立腹して早速之を洗ひ淨め、更に他の僧を請じて開眼供養を行つたが、其の夜在所中の者に地藏尊が取りついて「名僧の供養によつてやう〳〵目を開けたのに、再びわけもない供養にて迷はせたのは何事ぞ」と口ばしるので、人々大に驚いて、急ぎ一休を呼返して詫言をしやうと桑名邊まで、追懸けて行つた。一休は「これから返るのも面倒臭い、我が歌を三遍唱へ、之を地藏の首へ卷いて置け」といひながら其の犢鼻褌を外して渡した。村人は喜んで其の通りにしたので、祟はやんだといふ。例の馬鹿〳〵しい虚誕であらうが、かういふ話はいくらもある。

七一　鈴鹿御前

鈴鹿の多津加美阪、阪路廿六町、最も嶮しい所が八町、二十七曲あるといふ。箱根についての海道の難所である。それ故昔から色々の妖怪話がある。三人の男がこの山を越えて夕立に逢ひ、詮方なく、鬼が住むといふので人の宿らぬ堂に宿つた。さて其の中の二人は膽試しに、畫の内に見附けて置いた死人の屍を取りに行くといふ話が今昔物語に出て居る。此の時二人の出て行つた跡で、天井の格子から色々な珍しい顔が現れた。これは多分狐の所爲だらうなどと書いてある。此處には昔鈴鹿御前といふ鬼女が住んで居つた。田村麿が之を征伐して、遂にこれと夫婦になつたなどの古傳説も御伽草紙に作られて居る。賴光の大江山酒呑童子、維茂の戸隱山紅葉狩などと同じ類の武者物語である。謠曲の田村にも觀音の靈驗を受けて鬼神退治の事を作つてある。

さる程に山川を動かす鬼神の聲。天に響き、地に滿ちて、萬木千山動搖せり。

「如何に鬼神慥に聞け。昔もさる例あり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も、王位を背く天罰にて、千方を棄つれば忽ち亡び失せしぞかし。まして間近き鈴鹿山。ふりさけ見れば、伊勢の海。あの〻松原むらたち來つて、鬼神は黑雲鐵火を降らしつゝ、數千騎に身を變じて、山の如くに見えたる所に、「あれを見よ、不思議やな、「あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に千手觀音の光を放つて、虛空に飛行し、千の御手毎に、大悲の弓には智惠の矢をはめて、一度放せば、千の矢先、雨霰と降りかゝつて鬼神は殘らず討たれにけり。

この事はもとより正史には見えぬが、實際惡い强賊のやうなものが住んで居たのかも知れぬ。此の時の太刀を田村麿から天皇に獻じたのが、後に即ち源家重代の寶刀と傳へられた鬼切丸である。多津加美阪は單に阪といふ。阪の下は

即ち此の下にあるからの名である。阪上といふ姓にも因緣がないてはない。

七二　近江路

「阪はてる〳〵鈴鹿は曇る間の土山雨が降る」土山は已に近江國である。土山から水口、水口から石部、石部から草津に至つて、東海道は中仙道と合する。分れる方から言へばいはゆる追分である。伊勢路も亦ここから分れる。

夏見といへる所には人家の門毎に山水を筧とし馬に騎りたる人形二つ。くるくると回る機關を仕掛けたり。或は唐子などもあり。皆心太をひさぐ。むべも夏見とはいひけり。

左の方に始めて梅の木和中散といへる店あり。聞きしにも似ず、小さなる店と思ふに、又同じ店あり。三軒目の店よろし。四軒目之に次ぐ。島林定歳と記せり。五軒目を本家ぜざいといふ。門口に提灯を出せり。

目川の立場には菜飯と田樂ありて、今何處にても目川菜飯と呼ぶは此所より起れりと聞きて、伊勢屋といへる家に入りて、かの菜飯求むるに、田樂の豆腐溫かに物して、味よろし。

かく書いたのは蜀山人で、百餘年の昔、夏見の心太、梅木の是齋、目川の田樂菜飯、今尙昔の通りであるか、どうか。行つたことが無いから知らぬ。かくてとうとう姥が餅の草津に着くのである。信長に滅された六角義賢の子孫德川の初年までこゝに居て、鄕代官になつて居たが、故あつて誅せられた。其の兒僅に三歳。乳母之を悲んで餅を製り、之を賣つて其の兒を養つたのが此の餅の起源であるといふ。

七三　野路の玉川

六鄕川に調布の玉川を渡つた旅人は野路村のささやかな小池に萩の玉川の舊

蹟をしのぶ。

さをしかのしがらむ萩に秋見えて
　月も色なる野路の玉川　　太宰權帥仲光

明日もこん野路の玉川萩こえて
　色ある波に月やどりけり　　源俊頼

七四　瀨田の唐橋

濱名の橋の名を知らぬ人でも瀨田の橋の名は知つて居る。近江八景の一として瀨田の夕照で知られて居り、「急がば廻れ」の俚諺で知られて居り、藤原秀鄕の蜈蚣退治で知られて居り、壬申の亂を始として保元、平治、治承、元曆、承久、元弘、應仁等の度々の戰亂で知られて居る。天智天皇の御代に其の名の見えて居れば、建設の古い事はいふまでもない。唐橋といふ名のあるのは、もと韓國

の制に倣つたからであらう。今汽車の窓から南の方に能く見える。

七五　俵藤太

俵藤太秀郷が瀬田の橋の上で龍神に頼まれて三上山を七巻半まいた大蜈蚣を射殺し、龍宮に入つて御馳走になつた話は小供等も能く知つて居る。これは三井寺の鐘の縁起で古事談にも出て居り、太平記にも書いてある。おもふにこの話は神代の素盞嗚尊の大蛇退治と彦火火出見尊が海神の宮へ行かれた

瀬田の長橋

こと、此の二つの神話が結付いて、變化したものであらうとおもふ。都が京都へ遷つてからは、海とも遠ざかつて海の話が湖水に變つたのであらう。又將門征伐以後の秀郷の武名は隱がないので、遂に此の人の話になつたのであらう。秀郷は栗太郡の田原里に別業を營んで居つたといふから、近江國には緣故があるのである。田原藤太といふ名は其の地名から出たのである。然るに傳說によれば、龍宮から貰つて來た俵の米がいくら取つても〳〵盡きぬので、それで俵藤太と名乘つたとあるのが面白い。大蛇の代りに蜈蚣となつたのも面白い。唾液を付けてか蜈蚣の目を射つたといふのも面白い。

七六　鳰の海

日本第一の大湖、形が琵琶に似て居るので、琵琶湖ともいふ。單に淡海といつたのが、即ち國名の源である。遠州の濱名湖に對して文字を近江と書いたが、

遠江の方をトホタフミと讀ませ、淡海の名はやはり獨占して居る。東西十里、南北二十里、天智天皇は一たび志賀の都を御立てになつた位。其の後とても都に近いから、湖邊の名所舊蹟は尠くない。歌には鴉の海とよむ。

にほの海や月の光のうつろへば
波の花にも秋は見えけり　　藤原家隆

月影もにほてる浦の秋なれば
汐やくあまの煙だになし　　藤原爲家

五山僧徒が支那に往來するやうになつて、瀟湘の八景などを諸所の風光によそへる事が流行したが、いつか近江八景といふものも出來た。これは明應年間に近衛關白が附けられたのだといふ。瀬田夕照、粟津晴嵐、石山秋月、比良暮雪、唐崎夜雨、堅田落雁、矢橋歸帆、三井晩鐘の八つ。武藏の金澤にも八景があるが、琵琶湖だけに、近江八景が最も有名なものになつた。全く支那の眞似

である。しかも秋月や、暮雪や、夜雨や多くは同時に見られぬ景色である。

七七　石山寺

日本の中古文學と離れぬものは石山寺である。物語といはず、日記といはず、女文の平安文學には必ず石山詣の記事がある。はては紫式部はこゝに參籠して源氏物語を作つたなどの傳說がある。源氏物語の註釋書を湖月抄といふのも此の俗說に據つたのである。今も源氏の間と言つて、什寶に紫式部の使つたといふ硯もあるさうだ。併しその誤であることは賀茂眞淵、本居宣長などの先覺が已に論じ盡された。併し蜻蛉日記の作者も、枕草子の作者も、和泉式部も、紫式部も、皆一度はこゝに參詣したには相違ない。又度々火事に遭つたにも拘らず、古い寺であるから立派な物もあつて其の什寶の中數點は近年國寶に指定せられた。石山といふのは石が多いからで、石光山石山寺といひ、今は西國巡禮

十三番の札所である。

七八　兼平塚

粟津の軍の終には心は猛く思へども、運の極の悲しさは主從三騎に成りにけり。まして中有の旅の空。獨り行くなる道なれば、おもひやるこそ哀なれ。木曾殿鐙蹈張り、弓杖衝きて、今井に宣ひけるは、日頃は何とも思はぬ薄金が、などやらん重く覺ゆるなりと宣へば、兼平何でうさる事侍るべき。日頃に金もまさらず。別に重き物をも附けず、御年三十七。御身盛なり。御味方に勢の無ければ臆し給ふにや。兼平一人をば、餘のもの千萬騎とも思召し候ふべし。終に死すべきもの故に、わるびれ給ふな。あの向ひの岡に見ゆる一むらの松の下に立寄り給ひて、心靜かに念佛申して御自害候へ。其の程は防矢仕つて、やがて御伴申すべし。あの松の下へは廻らば三町、直には一町に

はよも過ぎ侍らじ。急ぎ給へと泣く〳〵涙を押へくどきければ、木曾は名殘を惜しみつゝ、都にて如何にも成るべかりつれども、此處まで落ち來つるは汝と一所に死なんとなり。何處までも同じ枕に討死せんと思ふなりと宣へば、今井いかにかくは宣ふぞ。君自害し給はば、兼平即ち討死也。是をこそ一所に死ぬるとは申せ。兵の剛なると申すは最後の死を申す也。さすが大將軍の宣旨を蒙る程の人、雜人の中に打伏せられて首を取られんこと、心憂かるべし。疾く〳〵落ち給ひて、御自害あるべしと勸めければ、木曾誠にと思ひ、向ひの岡松を指して馳行きけり。今井は木曾を先に立て、引返し〳〵命も惜まず戰ひけり。木曾は今井を振捨てゝ、暇に任せて歩ませ行く。頃は元暦元年正月二十日の事なれば、峯の白雪深くして、谷の氷も解けざりけり。馬も弱り、主も疲れたりければ、とかくすれども甲斐ぞ無き。木曾は今井や續くと思ひつゝ、後へ見返りたりけるを、相摸國住人石田小太郎爲久がよつ引

いて放つ矢に、内甲射させて間額を馬の頭に當てうつぶしに伏しにけり。爲久が郎黨二人、馬より飛下り、深田に入つて木曾を引落し、やがて首をも取りてける。今井之を見て、今ぞ最後の命なる。急ぎ御伴に參らんとて、進み出て〻申しけるは、日頃は音にも聞きけん、今は目にも見よ。信濃國住人中三權頭兼遠が四男、朝日將軍の御乳母子、今井四郎兼平也。鎌倉殿までも知し召したる兼平ぞ、首取つて見參に入れよやとて、數百騎の中に蒐入つて、散々に戰ひけれども、大力の剛の者なりければ、寄つて組む者はなし。唯開いて、遠矢にのみぞ射ける。されどもかぶとよければうらかかず。あきまを射ねば手も負はず。兼平は箙に殘る八筋の矢にて八騎射落しける。太刀を拔いて申しけるは、日本一の剛の者、主の御伴に自害する、見習へや、東八箇國の殿原とて、太刀の切先口にくはへ、馬より逆に落ち貫きてぞ死にける。平家を追立て〻武名時世を驚かした旭將軍、何ぞその終の悲酸なるや。扨

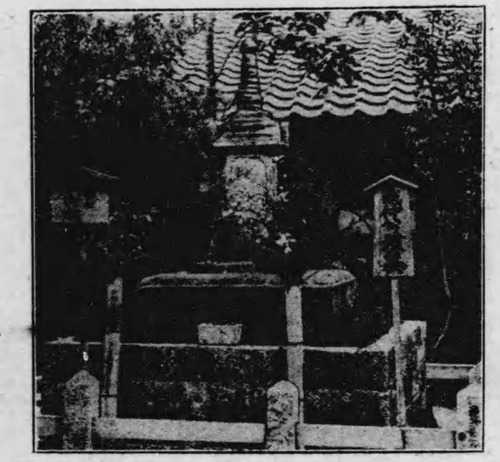
は又兼平が最後の男々しさよ。平家一門の最後には如何にも物あはれな話が多いが、粟津の原の戰の一節を讀んで、同情の念を起さずには居られぬ。

大木曾のあら山櫻末終に
雪と散行く粟津野の原　　石川依平

七九　義仲寺　　芭蕉

木曾殿と背中合せの寒さかな

馬場の義仲寺境内義仲塚の右に芭蕉翁の墓がある。「すべて此處の樣大磯の鴫立庵に似通ひて、彼は小淘綾の磯を後にし、是は鳴の海を前にす。彼も此も名に負ふ所ながら訪來る人繁き儘に物古りし樣ならぬぞ憾なる」と言つたが、今は如何てあらう。大磯の鴫立澤では、歌人西行が美人虎女と同居し、爰では俳人芭蕉が英雄義仲と同居して居る。薄命は何方も同じてある。



義　伸　寺

八〇　大　津

さゞ波の志賀の辛崎さきくあれど
　大宮人の船まちかねつ

と柿本人麿の詠んだ歌を想ひ、

さゞなみや志賀の都はあれにしを
　昔ながらの山櫻花

次で武藏守忠度を想起し、遙かにながめる比良の山、比叡の山、古來の英雄、美人、名僧、歌人の事業は走馬燈のやうに眼前に泛び來つて、此のあたり、唯古來の日本歷史を一

所に集めたやうな感を起させる。

雪ならば幾度袖を拂はまし
　花の吹雪の志賀の山越

八一　逢　阪　關

これやこの行くもかへるも別れては
　知るも知らぬもあふ阪の關

蟬丸が逢阪の關に庵室を結んで居つた所へ、博雅三位が毎夜忍んで來て、いつかは流泉啄木の曲を彈くかと待ちこがれたといふこと今昔物語に載せて、藝術に熱心な話。かの豐原時秋が新羅三郎の後を追うて、足柄山まで下つたのと、異曲同工の物語である。昔人は逢阪の關を出づれば已に東路に出た心持で、この關を越えるには無限の感慨をもつたに相違ない。東關紀行に、

駒引わたる望月の頃も漸く近き空なれば、秋霧立渡りて深き夜の月影ほのかなり。木綿附鳥かすかにおとづれて、遊子尚殘月にゆきけん函谷の有様思出でらる。

八二　關寺小町

蟬丸は男、小町は女、小町小町が老衰して歎きを逢阪關につないだ關寺小町の一曲も、逢阪山といふだけに人の感を惹くことが多いのであらう。

關寺の鐘の聲、諸行無常と聞くなれども、老耳には益もなし。逢阪の山風の是生滅法の理をも得ばこそ、飛花落葉の折々は、好ける道とて、草の戸に、硯を鳴らしつゝ、筆を染めて、藻鹽草、書くや言の葉の、枯々にあはれなるやうにて强からず。强からぬは女の歌なれば、いとゞしく老の身の弱り行く果ぞ悲しき。

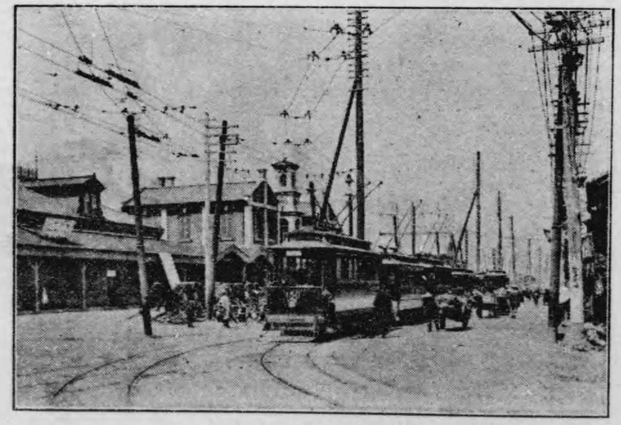
八三　山科

東京の町はづれに泉岳寺の墓を訪ふものは良雄が山科の閑居を忘れぬであらう。京都に近づいて、再び四十七士を想出す機會を得るのである。

八四　稻荷山

昔は粟田口から三條大橋についたが、今は近く稻荷山の朱の鳥居を汽車の窓から拜んで、遙かに東寺の五重塔を望みながら、七條の停車場につく。

關寺小町　山科　稻荷山



京都七條停車場

＊　＊　＊　＊

京都の近傍には書きたい事はまだ〳〵多い。途中にも書きたいことを大分落して來た。熱田以西は殊に急行になつた。いづれ又其中に出直さうと存ずる。

＊　＊

東海道五十三次終

名數雜談

小引

『一富士二鷹三茄子』。『四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙』。毎日三度の食事から春秋四季の移變、人間萬事數を離れず。五常といひ、六道といふは道の教。支那に、希臘に七賢人あれば、我が國には忠義の八犬士もあり、馬鹿の八笑人もある。天然人事、おしなべて數を以て物を整へること、東西とも に千萬無量といはねばならぬ。今其の最も著名なるものを拾つて、名づけて名數雜談といふ。もとより九牛の一毛に過ぎないのである。

（一）

萬世一系の我が日本國一人と申すは天皇を指し奉る語である。大寶令に太政大臣は一人に師範して、四海に儀形たりとある。上御一人と申すのである。さて太政大臣はそれ程重い役であるから、適任の人が無ければ則ち之を闕くといふので、則闕の官ともいはれたのであつた。後藤原氏は代々之に任ぜられることになつて、はては攝政關白などいふ名目も出來て、朝政を取まかなふ事になつた。一の人といふのは攝政關白の異名である。上御一人を除いて臣下中の第一の人である。一座の上に居る人で、外國語で首相の事を Premier といふのによく似て居る。

一は物のはじめをいふから、第一の皇子を一の皇子一の宮など申し奉り、又上皇が一時に二所三所もお出來になつた時には一の院（又は本院）、中院、新

院などと申し奉つた例もある。併し國々に一の宮といふ神社のあるのは、出來た順序といふのでは無い。其の國中での最も貴い宮といふので、社格に等級を立てたのである。山城の賀茂、攝津の住吉、伊豆の三島といふ類で、二の宮、三の宮、四の宮などもある。現に處々の地名にも殘つて居る。我が國は昔から神祭の儀には鄭重を盡したので、昔は國司が任に就けば、先づ其の國の神社に參拜したのである。これを拜神といつた。其の時に第一に參拜したのが、後に其の國の一の宮といふやうになつたのだといふことである。

（二）

我が國で祭祀を重んぜられたことは大寶令に神祇官を置かせられたのでも分る。すべて律令の制定は當時の支那の制度を本とせられたのであるが、支那には神祇官などが無い。日本古來の敬神の風によつて、太政官の上に神祇官を置

かせられたのである。大寶令で官の名のつく御役所は神祇官と太政官。之を二官といつた。

中古では任官の事が春秋二度に行はれた。正月のが縣召といつて專ら地方官の叙任。秋のが京官で在京の官人を任命せられた。之を春秋二度除目といつた。今日でも官吏の定期叙勳は六月と十二月の二度に行はれる。又皇靈祭は春秋二度ある。運動會なども春秋二季に行ふことが多い。

二つは物が雙ぶ。生物には雌雄男女がある。我等の手足にも右左がある。耳も目も二つある。夜もあれば晝もある。こゝに於て陰陽といひ、乾坤といふ。マイナスとプラス、表と裏、すべて兩々相對するものは世間に多い。物と心は別物である。善と惡とも同じものでは無い。總て物事を二つに分けて研究する傾向を哲學上では二元論(Dualism)といふ。これは單一の元理で全宇宙を解釋しようといふ一元論(Monism)、又は本來自立して居る多數の實在から宇宙を說

明しようといふ多元論(Pluralism)に對しての名目である。

神社に參詣しても、隨身門には俗にいふ矢大神と左大神がある。これは豐磐間戸神、奇磐間戸神といふ御門を守る神を形どつたものといふ說であるが、裝束は中古兵仗を帶して、攝政關白や大臣參議などの御供をした隨身姿である。又佛寺に參れば左右に金剛力士が居る。左のが密迹金剛、右のが那羅延金剛、佛法守護の力士で阿といひ吽といふ息の出入をあらはしたものだといふ。不動明王の兩側には、矜迦羅、制多迦の二童子。神殿を中央に左右の狛犬。本尊を眞中にしての燭臺や、造花や、すべて左右對立の二元主義があらはれて居る。すべて物を對に揃へることは綺麗なものである。

天下の柄は二つ。曰く文曰く武といつたのは魏元忠の言。賞は功を勸め、罰は過を懲す。賞罰を二柄としたのは劉勰。

晉の王羲之、王獻之の二人は書の名家。之を二王といふ。羲之は大王で、萬

葉集には羲之や大王と書いてテシといふ假名に使つて居る。これは手師の意である。

醍醐天皇の皇子村上天皇の皇弟兼明親王は最も翰墨に長け、才名一時に高かつた御方である。藤原氏に忌まれて隱遁せられて後、かの有名な菟裘賦を作られた。村上天皇の皇子で圓融天皇の御弟具平親王も亦詩文の才藻が尋常でなかつた。二親王とも中務卿になられたので、兼明親王を前中書王、具平親王を後中書王、併せて前後の**二中書王**。

(三)

此の兼明親王と藤原佐理と藤原行成の三人を**能書の三蹟**といふ。佐理が伊豫の三島明神の夢の告によつて其の神社の額を書いたといふ話は大鏡に出て居る。行成は後世の世尊寺流といふ書道の祖である。又兼明親王を除いて小野道風を

加へて**本朝の三蹟**ともいふ。

これより以前、平安初期の能書家としては嵯峨天皇、橘逸勢、釋空海を**三筆**といふ。空海は即ち弘法大師、弘法にも筆の誤などいふ諺のあるを見ても、其の能筆を稱へられたことが知れる。弘法大師は詩も達者、文も達者、其の詩文集の性靈集を見ると、書道にも中々苦心したので、嵯峨天皇や淳和天皇に筆を獻上する文なども見える。

書の三體は眞行草。眞は立つが如し。行は行くが如し。草は走るが如し。眞書の書を省いて片假名が出來、草書から平假名が發達して來たことは誰も知つて居る。併し片假名は吉備眞備の作、伊呂波は弘法大師の作だなどといふのは間違である。伊呂波四十七字の歌を弘法が作つたといふことも疑はしいのである。

高尾山の鐘の銘を作つたのが菅原是善、これは即ち道眞の父、橘廣相が文

を作つて、藤原敏行が書を書いた。いづれも絶品揃で、當時の人は之を三絶といつたとある。

菅原道眞は儒門から出身して右大臣にまでなつた。明治時代には學者から大臣になることは珍らしくも無いが、門閥のやかましい時代には稀有の事であつた。聖武天皇の時左大臣になつた吉備眞備、圓融天皇の朝左大臣になつた藤原在衡、いづれも學者であつたので之を**儒家の三大臣**といふ。此の在衡は決して朝參を怠たつたことの無い人で、或日大暴風雨、今日は流石の在衡も參るまいと言つて居る言葉の未だ終らぬ中、簑笠を着けて參內したといふ謹直な人であつた。文章生から身を起して、左大臣にまでなつたのである。

歐陽修は文章を考へるのには**三上**がよいと言つた。三上とは馬上、厠上、枕上である。隨分長雪隱の男であつたと見える。

親子兄弟三人とも文章家で名高いのは父の蘇洵(老泉)、其の子の蘇軾(東坡)、

軾の弟の蘇轍(潁濱)、老蘇、大蘇、小蘇と分けて、之を**三蘇**といふ。唐宋八大家の三人だけは一家で占めて居るのである。

蘇東坡の言には『詩は杜工部に至り、書は顏魯公に至り、畫は吳道子に至り、天下の能事畢る。』これは詩書畫の**三至**である。古來の名人を賛めて言つたのであるが、古人を理想としただけでは古人より上にはなれぬ。すべての事柄に於て古人を凌駕する心得が必要である。

支那で**三公**といふのは周では太師、太傅、大保。前漢では、大司徒、大司馬、大司空。後漢では大尉、司徒、司空。唐の世も同じである。日本では太政大臣、左大臣、右大臣。

三后は太皇太后、皇太后、皇后。**三宮**ともいふ。三宮に准じて、其の給祿を賜はるのを准三宮、准三后などといふのである。准后北畠親房の如きは即ち其の一例。親房は後中書王具平親王の後裔で、博覽多識、職原抄以下著述が

多いが、就中後醍醐天皇中興の業の成らぬのを慨歎して書いた神皇正統記は神器の所在を明らかにして、所謂南北朝の大義名分を明らかにしたのである。

三種神器は我が皇室の御寶、歷代の天皇は必ず之を繼承し給ふのである。皇室典範第二章第十條に曰く、

『天皇崩ズルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク』

日本の假名文の歷史で古いのは大鏡。藤原時代の有樣を面白く文學的に綴つてある。文德天皇から始まつて居るので、其の以前を後に別人が書いたのが水鏡。又後鳥羽天皇以後鎌倉時代を書いたのが增鏡。此の三つを併せて**三鏡**といふ。

歌の勅撰集で一番古いのが古今集。これは醍醐天皇の御世、紀貫之等の撰上したもの。次に後撰集。これは村上天皇の時。次に拾遺集。之を**和歌三代集**といつて歌の手本と珍重したのである。それから次々に出來て廿一代勅撰集まであ

るが、第九番目の新古今集は古今集とともに最も名高い。後になればなる程、陳腐なものばかりで、あまり價値のあるものは出なくなつた。

新古今集の歌の中に、秋の夕暮を詠んだ名歌が三つある。

見渡せば花も紅葉も無かりけり　　定家

浦の苫屋の秋の夕ぐれ

さびしさは其の色としもなかりけり　　寂蓮

まき立つ山の秋の夕ぐれ

心なき身にもあはれは知られけり　　西行

しぎ立つ澤の秋の夕ぐれ

これが新古今集の**三夕の歌**である。

鎌倉以後になつては學問が衰微して學者が少くなつた。それ故知つて居る人は容易に惜しがつて人に敎へぬ。自分で研究して學ばうといふのでは無く、唯

人から聞いた事を、後生大事と守つて居るので、敎へて仕舞へば、自分の種が無くなるから敎へぬのである。祕訣があるとか口傳に在るとか言つて、勿體をつける。盲千人の世の中であるから、その少しばかりの知識を有難がつて珍重する。かういふ風はいつでも無學時代に存在するので、西洋でも日本でも同じ事であつた。鎌倉以後、何の道、何の藝にもさうであつたが、歌の學問に於ても古今傳授などと稱へて、古今集の解釋に祕事を立てゝ、普通の人には中々授けない。今日から見れば實に滑稽至極である。例へば古今集の歌の中に呼子鳥、百千鳥、稻負鳥といふ鳥の名のあるのを三鳥と唱へて祕訣にした。又源氏物語の三祕訣として傳へられたのは楊名介、三か一、宿直袋の三つである。こんなことはつまらぬ事だから、こゝに一々言はぬが此等の事を尤らしく何事も神祕に考へるやうになつて、むやみに古人を崇拜した結果、和歌にも神さまが出來た。和歌三神といふのは柿本人麿、住吉明神、玉津島明神である。

大和の畝火山、香具山、耳梨山の三山は鼎の足のやうに向ひ合つて立つて居る美しい山である。香具山と耳梨山は男山で、畝火の女山を爭つたといふ古い傳說がある。萬葉集の中に、

かぐやまはうねびををしと耳梨と相爭ひき……

といふ天智天皇の御歌もある。かういふやうに二人の男が、一人の女を爭つたといふやうな話は形が變つて幾通りにも傳はつて居るので、櫻兒の話、菟名日處女の話、眞間手兒名の話など皆同じ筋の傳說である。謠曲に作つた生田川もつまり同じ話で、これは大和物語から出たのである。話の筋は一人の女が二人又は三人の男に言寄られて、いづ方へ靡くことも出來ず、身を投げて死ぬといふので、やさしい處女心が其の中心になつて居るのである。

日本の女子は、あくまで從順である。從順が其の美德である。これは支那の敎から來た三從即ち家に在りては父に從ふ。人に適さては夫に從ふ。夫死して

は子に從ふといふ三つの從ふ道から影響せられた點もあらうが、前の三山傳說などを考へても、日本婦人從順の美德は古代からの特性であらうとおもふ。從順の德は婦人ばかりでは無い。或場合に於ては男子にも必要である。殊に未だ獨立しない修學時代等に於ては規律を守り、命令に服從する心掛があつて其の習慣を養はねばならぬ。余おもふに今の青年訓としては家に在りて父母の命に從ひ、學校に在りて教師の命に從ひ、奉職して長上の命に從ふ。此の三つを**青年の三從**と心得てはどうであらうか。

父に非ざれば生れず。食むに非ざれば長ぜず、敎に非ざれば知らず。民は之に生る。之に事ふること一の如くす。**三事**これなり。

三孝は大孝は親を尊ぶ。其の次は辱めず、其の下は能く養ふと。禮記の古言。

三親とは夫婦、父子、兄弟。

人によつて異なる**三好**。(一)衆人は己に從ふものを好み、(二)賢人は己の正

しきを好み、(三)聖人は己の師を好む。

父母俱に存し兄弟故なきは一樂なり。仰いで天に愧ぢず、俯して人に恥ぢず、二樂なり。天下の英才を得て之を敎育す、三樂なり。これ即ち孟子のいはゆる**君子の三樂**。

程伊川の言ふ人世の**三不幸**とは、少年高科に登る、一の不幸なり。父兄の勢によりて美官となる、二の不幸なり。高才ありて、文章を能くす、三の不幸なり。第三のは少し不思議に聞えるであらう。然しこれは今の世にもよくあてはまる。一寸文才があつて、雜誌の懸賞にでもあたると、直に得意になつて、大文士にならうと氣焰を吐く人などには眞に頂門の一針であるかも知れない。

父は子の綱たり、君は臣の綱たり、夫は妻の綱たり、これ**人倫の三綱**。

同じく三綱でも僧正、僧都、律師は**僧官の三綱**。

(一)少時は血氣未だ定まらず、之を戒むる色に在り。(二)壯時は血氣方に剛

なり、之を戒むる闘に在り。(三)老時は血氣既に衰ふ、之を戒むる得に在り。戒むべき所は年齢によつて異る。これ**君子の三戒**。

我が國の**三戒壇**といふのは奈良の東大寺、下野の藥師寺、筑前の觀音寺。

佛法では欲界、色界、無色界を**三界**といふが、今日の學術では自然界を三つに分つて、礦物界(Mineral Kingdom)、植物界(Vegetable Kingdom)、動物界(Animal Kingdom)の三界。

人類の金屬を用ひ始めたのは餘程開けた後の事。最初は木や石を武器其の外色々の道具に使つた。之によつて**人類の三時代**を分つのが、第一石器時代(Stone Age)、銅器時代(Bronze Age)、鐵器時代(Iron Age)。

人の一代は最初は四本で歩行き(這ふ)、中頃は二本、最後に三本(杖をつく)。即ち**人生の三期**で、これは怪物スフィンクスがかけた謎である。

同じく希臘神話で**人の運命を司る三女神**は(甲)クローソー、(乙)ラケシス、

(丙)アトロポス、絲を紡ぐに譬へて、(甲)は生命の絲を紡ぐ竿を持ち、(乙)は生命の絲を紡ぎ、(丙)は諦切れた時、其の絲を斷り斷つといふ。

Three Harpies, Three Graces などと希臘の神には三を以つて數へるのが多い。前者は顔は女で、體は鳥やら馬やら。後者は文藝の神ミューズの友三女神。彫刻によくある。希臘の哲學者ピタゴラスは三は初中終を示したもので、完全な調和を示すといつた。それ故三を神の表象としたことが多い。地、海、空を**世界の三元**ともいひ、人體は死滅すべき部分、神聖な精氣の部分、氣體の蒸發すべき部分と分つべきものと考へ、之を**人體の三元**ともいつた。

耶蘇教で**三位一體**といふのはゴッド、基督、聖靈の三つが三にして一、一にして三、合して神をなすといふ說。佛法の**佛三身**は、法身、報身、應身、之を月に譬へて、法身を月とすれば報身は月の光、應身は月中の水影、佛身は三身の性能を具へるが故に三身即一佛と說く。

三尊といふのは彌陀、勢至、觀音。又釋迦、文珠、普賢。又藥師、日光、月光。すべて名數を貴ぶのは印度が一番多い。佛教の語て三の字の附いたのを擧げれば實に際限が無い程多い。

佛教の**三世**は過去、現在、未來。現在は即ち今生、過去は前世、未來は來世である。文法でいふ動詞の時とは違ふ。つまり、我等の生前と死後の分らぬのがすべての宗教の根元であらう。佛教は原因結果の規則を本として、善因には善果が結び、惡因には惡果を結ぶと說いた。其の結果の直ちに今生に現れるのが順現報、今生の業が來世になつて現れるのが順生報、來々世以後に現れるのが順後報、之を**三報**といふ。

佛教の因緣說に卜筮の法を交へ、陰陽五行の理を併せて人の生年月、人相等から現在、過去、未來三世にわたつて禍福を說くのを**三世相**といふ。荒唐不稽て學理上の論據は無いが、今でも信ずる人が多い。

佛教で**三寶**といふのは佛、法、僧。我が國で佛教の流布を奬勵せられた聖德太子の憲法にも篤く三寶を敬へとある。奈良朝佛法極盛の世となつては、聖武天皇は萬乘至尊の御身を以て畏くも三寶之奴と仰せられた。

昔の日本では神儒佛が三つの敎、支那では釋、儒、道が三敎である。世界的**三大宗敎**といへば佛敎基督敎回々敎の三つを擧げねばならぬ。

支那太古の歷史は**三皇**五帝から始る。三皇は伏羲、神農、黃帝。伏羲氏は八封を畫し、書契を作り、嫁娶の制を定め、牧畜漁獵の法を敎へ、神農氏は五穀を植ゑたり、醫藥を定めたり、黃帝は官職制度を定め、衣服器用を製り、曆本や樂器も拵へたといふ。人類の生活が段々進步して行く有樣を言つたものであらう。

堯舜禹と相禪つたが、禹の子孫は世襲の王となつて夏と稱へた。夏は桀王に至つて亡び、殷は湯王に起つて紂王に至つて亡び、周の武王に至つて其の末は

四分五裂、春秋戰國の世を經て、遂に秦國に亡された。此の夏、殷、周を**三代**といふ。

支那の帝王は日本の樣に萬世一系で無いから、幾度も幾度もかはる。東漢の末三國に分れて對峙した事がある。即ち魏、吳、蜀の**三國**で所謂三國志時代である。諸葛孔明の精忠や、關羽張飛の武勇は諸君も定めし知つて居るであらう。

三國の末は、魏の大將であつた司馬氏の有に歸した。これが即ち晉。西晉は五十餘年で東晉の世になつた。彼の名高い陶淵明といふ詩人は東晉の末の人。菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見て居つた。其の頃惠遠といふ名高い僧があつて、廬山に隱遁して山を出ないこと三十年。或日淵明を招いて遊びに來いといつた。淵明は陸修靜といふ者と二人で之を訪ひ、歡話を盡しての歸途、山を出たことのない惠遠は、知らず〳〵客を送つて虎溪の橋を渡つたのである。淵明さては年來の禁足を破られたかと、三人一時にどつと笑つたと云ふ

のが、即ち**虎溪三笑**の圖の由來である。

虎溪三笑圖（橋本雅邦筆）

高祖を助けて天下を一統した漢の**三傑**は蕭何、張良、韓信、これも漢楚軍談

などで御存知の筈。

漢の高祖が關中に攻入つた時、**法三章**を約すといつて次の三箇條を定めた。(一)人を殺すものは死、(二)人を傷ふものは罪に抵す、(三)盗するものは罪に抵す。これ迄秦の苛法に苦しんで居つて、どうなることかと心配して居た人民は之を見て胸を撫下した。流石は漢の高祖てある。

羅馬の歴史では有名な**三頭政治**(Triumvirate)、第一回はポンペイウス、シーザー、クラッサスの三人。第二回はアントニウス、レピダス、オクタピアスの三人。

日本の開闢史でいへば、天地の初、混沌として未だ分れざる時成り出てました神が天之御中主神、次が神産日神、次が高産日神、之を**造化三神**と申す。

伊弉諾神が日向の檍原で身滌をなされた時に、多くの神様がお出來になつた。その中で最も貴い**神の三柱**第一が天照太神で、高天原を治め給ひ、第二が月讀

神で夜の國を治め給ひ、第三が素盞嗚神で海の國を治め給ふ。

天照太神の皇孫瓊々杵尊が始めて筑紫に天降つてから、其の皇子彦火火出見尊又其の皇子の鸕鷀草葺不合尊、此の三代は筑紫に都せられた。之を**日向の三代**と申す。神武天皇は即ち葺不合尊の皇子である。

神代の歴史中、女性て功勳の多かつたのは天鈿女命てある。天照大神が天岩戸にお隠れになつた時神樂を奏して遂に之を引出し奉り、又皇孫天降りの際には、他の男性の武將達と共に供奉して筑紫に下つた。後世になつて**三平二滿**即ち御多福が此の女神だといふやうになつた。

藤原氏の盛運時代、關白基經の子、時平、仲平、忠平の三人は、皆陞つて大臣となつた。時の人は之を**三平**といつた。

平安朝時代の公卿縉紳は皆文雅風流の才に長じて居つた。大井川の船遊には詩の船、歌の船、管絃の船と三通りの船が用意されて、それ〴〵自分の得意な

船に乘込むのである。三船の中どの船にも乘れる人は即ち何事にも堪能な才子、**三船の譽**といつて名譽の事にしたのである。

豐臣氏の**三中老**は堀尾吉晴、生駒正成、中村一氏。

徳川氏の一門水戸、尾張、紀伊は**御三家**。田安、清水、一橋は**御三卿**。

徳川寛永の三名臣は酒井忠世、土井利勝、青山忠俊、之を**寛永の三輔**といつた。

寛政の三輔といふは、幕府の儒臣て揃も揃つて通稱に輔の字があつたからである。即ち古賀精里(彌助)、尾藤二洲(良佐)、柴野栗山(彦輔)である。

維新の三傑は西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允。

任官の三等は勅任、奏任、判任、と定まつて居たが近年は勅任の上に更に親任官が出來た。

現時**三大節**と稱せられるのは新年、紀元節、天長節。

日本の姓氏は神別、皇別、蕃別の三つに分れる。これが**姓氏錄の三段**。源氏や平氏は皇別で、藤原氏は神別である。蕃別の祖先は外國人。

三壽といつて上壽は百歳、中壽は八十歳、下壽は六十歳。これは支那人の言つたこと。大隈伯は百二十五歳まで生きられるさうだから、上々壽とでもいはねばなるまい。

一月を**三旬**に分けて上旬、中旬、下旬といひ、又之を上澣、中澣、下澣の**三澣**に分つ。澣は洗ふことで十日目に一度つゞ洗濯する意味である。これも支那人の言つたことだが、無性な支那人には一月も二月も湯にはいらない不潔なのが多い。

(四)

一年の**四季**は春夏秋冬。春はハナミ、夏はスゞミ、秋はツキミ、冬はユキミ。

「春山は笑ふが如く、夏山は滴るが如く、秋山は粧ふが如く、冬山は睡るが如し。」老人曰く、「目はかすみ、耳に蟬鳴き、はは落ちて、頭に雪の積りけるかな。」

方角の**四方**は東西南北。之を十二支に配當して北が子、南が午、東が卯、西が酉、東北は丑寅（艮）、東南は辰巳（巽）、西南は未申（坤）、西北は戌亥（乾）。地球の北極から南極に亘る想像の線を子午線といふ。日南に中する時が一日の眞中故その時が正午。晝前は午前晝過が午後。昔は申の刻、丑の時など言つたことは古文學を見て既に御承知の事であらう。

昔は動物の發生に**四生**の別があるといつて、人獸の樣なのを胎生、鳥魚のやうなのを卵生といふのはよいが、其の外に濕生、化生といつて、蟲けらなどは自然に湧くものだと思つて居た。下等動物になれば、いはゆる分裂繁殖で殖えるが、決して獨りでに湧くものでは無い。

地水火風を**四大**といふのは印度人の考。化學の開けなかつた昔、これを元素

と思つたのは東西ともに同じである。科學的の書物でないものには、今でも此等をエレメントと書いてある。現今八十何元素。まだ〳〵折々新しい發見があ×る。

佛教保護の**四天**は多聞天、持國天、增長天、廣目天。

（四天王の一）奈良東大寺傳來の廣目天立像

多聞天は即ち毘沙門天である。すべて天といふのは Deus 神といふ義である。我が國の四天王像で名高いのは奈良の三月堂にあるので、國寶になつて居る。

この四天王に象つて、時にすぐれて名高い人を**四天王**といふのは非常に多い。

早い頃の武將の四天王は平維衡、源頼信、平致頼、藤原保昌。頼光の四天王は渡邊綱、坂田金時、碓井貞光、卜部季武。源義經の四天王は鎌田盛政、同じく光政、佐藤嗣信同じく忠信。源義仲の四天王は今井兼平、樋口兼光、楯親忠、根野井行親。新田義貞の四天王は、篠塚伊賀守、亙理新左衞門、栗生左衞門、畑六郎左衞門。織田信長の四天王は柴田勝家、滝川一益、丹羽長秀、明智光秀。四天王の一人が謀反するやうでは何にもならぬ。武田方では板垣信形、飯富虎昌、小山田昌辰、甘利信益。上杉方では直江實綱、甘糟景持、宇佐神良勝、柿崎景家。大阪方では木村重成、眞田幸村、長曾我部盛親、後藤基次。關東方では井伊直政、本多忠勝、榊原康政、酒井忠次、まだ〳〵いくらもある。

近古時代和歌の**四天王**と呼ばれたのは頓阿、兼好、淨辨、慶運。徳川時代の京都和歌の四天王は伴嵩蹊、小澤蘆庵、澄月、慈延。

源平藤橘を**四姓**といつたのは、其の姓のものが最も榮えたからであらう。源平二氏が武將の間に多かつたことはいふまでも無い。歴代の將軍家は皆清和源氏の末。足利新田も源義家から出て居るので、徳川氏は新田氏の後である。織田、北條は平家。楠木氏は橘である。藤原氏は攝關の家として其の支流頗る多い。

藤原不比等の四人の子武智麿が南家、房前が北家、宇合が式家、麻呂が京家。これを藤原氏の**四祖**又は**四門**といふが、その中で房前の後即ち北家が獨り繁昌して後世の攝政關白皆この家筋である。「北の藤波獨り榮ゆる」といふのはこの事である。

士農工商を**四民**といつて士を四民の頭に置き、士だけが意張つて居たのは昔の武家時代の有樣であつた。今は四民平等いづれも兵役納税の二大義務を負擔して、我等自ら此の國家を護つて居るのである。職業は神聖である。職業の

如何によつて貴賤の別は無い。

世に四恩の候ふ、小松内大臣重盛の父を諫めた。其の**四恩**は天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩。これは今の人も服膺すべき事柄である。

支那の揚震といふ人が、竊に金を贈らうとしたものに向つて、「汝は誰も知らぬからといふが、天知る、地知る、汝知る、余知る、尙誰も知らぬといふことが出來るか」と云たのは、實に立派な心懸、即ち揚震の**四知**。

惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり。辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり。孟子の說いた**四端**。

老いて妻のないものが鰥、老いて夫のないものが寡、幼くして親のないものが孤、老いて子の無いものが獨。此の**四窮民**は人生として最も不仕合なもの。

孤兒院養育院等は近年益々此等の人の爲に造られる。尤も貧乏人に限る。

論語の中の四勿は非禮視る勿れ、非禮聽く勿れ、非禮言ふ勿れ、非禮動く勿

れ。

大學、中庸、論語、孟子の**四書**は、儒敎の要旨を委して居る千古不磨の名言が多い。

波羅門敎徒の四聖經といふべきは (1) Rigveda, (2) yajurveda, (3) Lama-veda, (4) Atharvavedaの**四吠陀**。いはゆる印度最古の文學で、實に世界の最舊文學である。佛書に違陀、韋陀、比陀、吠馱等と記し、又明論智論等と譯してあるのは即ち是である。

日本古代の法制の書は**律令格式の四類**に別れる。令は一般の法令で、式は各官職のそれ〴〵の事務の次第を書いたもの、令や式を犯したものを罰する法律が律、令律式等を時によつて改正變更したものが格である。

和歌の四式といつて、歌經標式、喜撰式、孫姫式、石見女式といふものがある。第一の歌經標式は藤原濱成の作だといふので、若しさう見れば、平安朝の

初から歌の法式などの議論があつた事になる。併し昔から僞書だといふ論が多い。

歌論は多く詩論から出たので詩の方に四聲八病といふ事があるので、歌の方でも四病八病などといふことを言出した。詩の**四聲**といふのは即ち平上去入の四聲。支那の言語には語ごとに一種の音調があつて、文字で書けば同じでも發音の仕方がそれ〴〵違ふ。支那の後世の詩は皆此の四聲の語をそれ〴〵錯綜して用ひるやうに規則が定つたのである。上去入の三聲は即ち仄聲で簡單に平仄といふ。日本人が支那の詩を作る時にも、やはりこの平仄を誤らぬやうに作るのである。

●○○●●○○　恩賜御衣猶在此　●○●●○○●●
去年今夜侍清涼　●○●●○○●●　捧持毎日拜餘香

黑は仄白は平である。これは七言絶句の平起の體式である。七言、五言の絶句、律、それ〴〵法式があるから、先生に聞いて御覽なさい。

絶句は四つの句から成立つて居つて、その四句を起承轉合といふ。第一句で起して、第二句で承け、第三句では全く轉じて方面を變へ、さうして、第四句で全部を收め、終結を付けるのである。

韻を踏むのは大抵一句置きである。七言絶句では、第一句第二句が對句の時は踏まないが、其の他は第一句の下にも踏む。前に擧げた菅公の詩では、涼、腸、香の三つが同じ韻の字である。それ故律を古く**四韻**とも言つたと見えて、源氏物語に「博士の人々は四韻、たゞの人はおとどを始め奉りて、絶句作り給ふ」などとある。

柿本人麻呂は名高い歌よみであるが、其の外に人麻呂といふ同名の人が三人、上道人麻呂、五手人麻呂、田口人麻呂。柿本と併せて**四人の人麻呂**。

崇神天皇の御時、大彦命を北陸道に、武淳河別を東海道に、吉備津彦を西海道に、丹波道主命を丹波に遣はされて四方を平定せしめられた。之を**四道將**

軍といふ。

支那では四方の未開人種を東夷、南蠻、西戎、北狄と唱へ之を**四夷**といつた。その中央に居つて自分は中華、中國と言つて居るのは今日でも同樣である。西洋人は中國を譯して The Middle Kingdom などと書いて居る。日本などは支那人から見れば、いはゆる東夷にあたるのである。それ故漢學崇拜の親玉物徂徠は孔子の像に題する贊の下に、夷人物茂卿などと書いたのである。戰國時代德川の初の頃に葡萄牙、西班牙人などが南の方から來たから、日本でも是等をば南蠻と唱へた事がある。

支那の漢の世、高祖は戚夫人の愛に溺れて、呂后の產んだ太子を廢さうとした事がある。其の時例の智惠人張良の謀で東園公、綺里季、夏黃公、甪里先生といふ四人の老隱遁者を賴んで來て太子の側に侍せしめた。高祖は之を見て驚いて、「何故卿等は朕の召に應ぜずして、太子の言ふことを聞いたか」と尋ね

た。老人はかねて賴まれて居つた事故、「太子の賢明なのを知つて居るから」と對へたので、高祖もはじめて合點して遂に之を廢することを思止つたといふ。

この四老人を**商山の四皓**といふ。

生、老、病、死、これが佛家でいふ人生の**四苦**。

西洋で **Four-outs の紳士**といふのは、一、禮義なし(Without Manners)、二、機智なし(Without Wit)、三、金錢なし(Without Money)、四、信用なし(Without Credit)。かういふ似而非紳士は隨分今の世には多いらしい。

文人畫でいふ**四君子**は蘭、竹、梅、菊。非情の植物の中にも君子はある。

(五)

手足の指は五本づつである。物を數へるにはまづ手の指を屈するのが通常。それ故數詞の語源を調べると五進法で物を勘定したといふ證據の知れるのもあ

る。これをQuintary Systemといふ。日本の數詞のいつ(itu)とと(to)も或は手(te,ta)に關係があるのであるまいかと想像される。それが原因かどうか知らぬが五を以て物を統べる事は東西ともに頗る多い。まづ第一に**五指**それ自身の名は支那では將指、食指、中指、無名指、小指といふ。中指、小指は日本も同じ

伊藤東涯の筆蹟

である。無名指といふ名のあるのも面白い。將指は即ち日本の親指。親指の方が親密でよろしい。食指といふのは指で突いて食つた餘波が殘つて居るのであらうか。日本の人さし指の方が奇麗である。食指動くなどともいふから、支那人は何か食ひたくなれば此の指が動くと見える。中指は日本では中指とも又は

高々指ともいふ。高々指は丈高指だといふ説もあるが、やはり高を二つ重ねた語であらう。無名指は日本で藥指又は紅さし指、藥を嘗める時、又は女が紅を唇に點ずる時用ひるといふ意味。英語では親指をThe thumb, 人さし指をThe index finger は日本と同じであるが、紅さし指をThe ring-finger といふのは流石に指輪をはめる風俗がおもはれる。中指、小指はやはり The middle finger, The smaller finger で變りは無い。手の指にはこのやうに色々名があるが、どこの國でも足の指には名が無い。

漢方の醫學では昔から肝、心、脾、肺、腎を**五臟**といつた。之に膽、胃、大腸、小腸、膀胱、三焦の六腑を併せて、五臟六腑といつたのである。

目で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、口で味ひ、皮膚で觸れる。これが人の**五感**。

目で見る色の白黑青黃赤を**五色**といつたのも昔の事、今の學術上では白と黑とは色の中に數へない。

耳で聞く音樂も宮、商、角、徵、羽の**五音**で、半商半徵が加はつて七音階をなす。即ち西洋のド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ソ、と同じである。

鼻で嗅ぐ物の香も五つに分れる。羶(肉の)、腥(魚の)、香(よい)、焦(こげる)、朽(腐るひ)　即ち**五臭**。

舌で味ふ味にも五つある。酸つぱい、苦い、甘い、辛い、鹹い。これが**五味**である。

これ等の感官の欲を恣にすることを戒めて色、聲、香、味、觸を佛家では**五欲**といふ。

世界の元素を木火土金水の**五行**として、之から五行相生、五行相剋などの說が出る。**五行相生**とは(一)木火を生ず、(二)火土を生ず、(三)土金を生ず、(四)金水を生ず、(五)水木を生ず。**五行相剋**とは(一)木土を剋す、(二)土水を剋す、(三)水火を剋す、(四)火金を剋す、(五)金木を剋す。中々旨く組立てゝある。

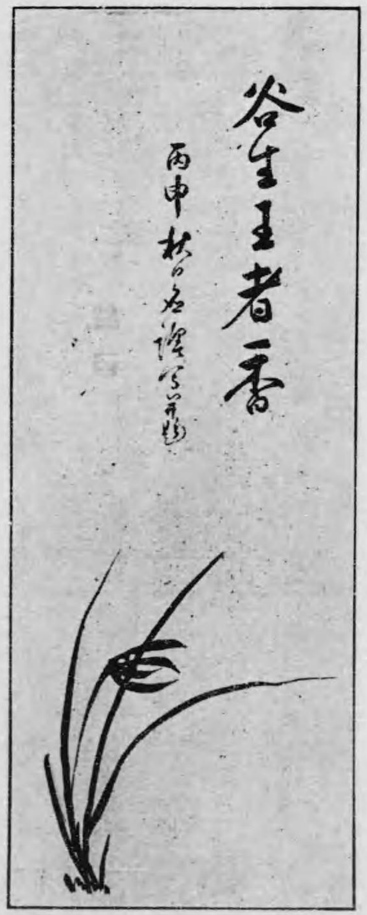
人の相生などを說くのも皆この根元の理を本とするのてある。五行を十干に配當するから甲乙は木、丙丁は火、戊己は土、庚辛は金、壬亥は水。故に甲を木の兄、乙を木の弟等、すべて兄弟と唱へたのである。

一夜を五更にわけて甲夜一鼓一更、乙夜二鼓二更、丙夜三鼓三更、丁夜四鼓四更、戊夜五鼓五更。

釋迦一代の教說を五つの時に分けて、**五時教**は華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃といふ。最初華嚴經を說かれたが大抵の者は何の事か分らぬ。聾の如く、啞の如くであつたによつて、又平易の方から說出して、段々とむづかしい深遠の理を說かれ、最後に法華經を說かれたといふのである。之を牛乳の味に譬へて華嚴は乳味、阿含は酪味、方等は生蘇、般若は熟味、法華涅槃は醍醐味といつてゐる。醍醐は乳の最もよく製せられた旨いもの。今でいへば蓋しチーズか。大鏡の文にも「法華經一部を說き給はんとてこそ先づ餘經をば說き給ひけ

れ。それを名づけて五時教とこそはいふなれ。」

佛家で說く**天人の五衰**。天人に衰弱の徵が見えると、(一)身の光が現じなくなる、(二)頭の上の華曼が萎み始める、(三)腋の下に汗が出る、(四)大小便が臭くなる、(五)本座とて居る處を動く樣になる。



堀川五藏の一伊藤蘭嶋の筆蹟

人の敎は父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、之を**五典**と

もいふ。**五常**といつて仁義禮智信。之れを**五性**ともいつた。**五情**は喜、樂、欲、怒、哀。

五逆罪は、(一)父を殺し、(二)母を殺し、(三)佛身より血を出し、(四)阿羅漢を殺し、(五)和合僧を破る。これはもとより佛者の言。

罪人を刑罰する法、支那には墨(入れ墨)、劓(劓切り)、刖(足きり)、宮(陽物をさる)、大辟(死刑)の**五刑**。太古からあつたが、日本の古くにはそんな殘酷な刑罰は無かつた。

笞、杖、徒、流、死が後の法律**五刑**であつたが、武家時代になつては、段々殘酷な刑罰が加はつて、死刑の中にも磔刑(はりつけ)だの、火刑(火あぶり)だの、果ては鋸引などいふ恐しい刑罰も出來たが、武士には刑罰を加へない。切腹仰付けて、自裁せしめるので、武士の名譽を貴び、自ら重んじさせたのである。

切腹を最も重いものとして、逼塞、閉門、蟄居、改易。之を武家の**五閑刑**といつた。

死の五等は曲禮に天子は崩、諸侯は薨、大夫は卒、士は不祿、庶人は死とあるが、我が國では三位以上が薨、五位以上が卒、其の他は死といふ定で、今も官報などの報告を見ると、それに據つて居るやうである。世間ではやゝともすると間違つて、伯爵で四位の人等をも薨ずなどと書くことがある。

今の華族は公侯伯子男の**五爵**がある。これは支那の周代の稱號を其の儘採用せられたので、明治になつて始めて日本に用ひられたのである。日本で此の五等の爵位を建てられたのは、古來の歴史に基づかれた理由もあらうが、一つは西洋の爵位がやはり、五等になつて居るからでもあつたらう。英國でいへば、Duke, Marquis, Earl, Viscount, Baron である。

藤原氏の北家が榮えて、その後が皆攝政關白となつた。鎌倉以後又色々の

家に分れた。後で**五攝家**と呼ばれて居つたのは、近衛、九條、二條、一條、鷹司の五家、今日は皆公爵家である。

昔の**五節供**は人日（正月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、星夕（七月七日）、重陽（九月九日）である。維新後全く廢つたが、近時又々再興の氣味がある。就中雛祭と鯉幟の二つは次第〳〵に、回復される傾が見える。これ等はすべても支那から傳來した風習であるが、三月の雛遊び五月の武者人形、支那には無い型を出し

鎌倉五山の一建長寺の山門

て日本化した處が面白い。

支那で東泰、南衡、西華、北恒、中嵩を**五岳**といふのに對して、日本でも高千穂、金剛、如意、愛宕、比叡を五岳といふ。

鎌倉京都の**五山**も亦支那の禪寺に五山があるのを眞似たのである。五山は時代によつて變つて居る。鎌倉の五山は建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺。

堀川五藏の一伊藤東涯の肖像

宋學の五先生は周濂溪、程明道、程伊川、張木下順庵は德川時代の宋學派の儒者、門人は眞に多士濟々であつた。就中**木門の五先生**といはれたのは榊原篁洲、雨森芳洲、新井白石、室鳩巣、祇園南海、皆一世の大家である。

伊藤仁齋は始めて古學を唱へて宋學には反對した人である。一生仕へず、京都の堀川に塾を開いて子弟を教授した。學問といひ、德行といひ、實に立派な人であつた。其の子五人、長男は源藏、次男は重藏、三男は正藏、四男は平藏、五男は才藏、皆父の學を嗣いで當時の碩學となつた。よつて世間では**堀川の五藏**といつた。就中、長男の源藏は即ち東涯、末子の才藏が蘭嵎で最も優れたから伊藤の首尾藏ともいつた。學者の子が、揃も揃つて立派なのは實に珍らしい。

（六）

六の數に移つて、第一に氣の附くのは**六歌仙**である。これは喜撰法師、大友黒主、在原業平、文屋康秀、僧正遍照、小野小町の六人。類別すれば、男が三人、女

が一人、坊主が二人。古今集の序文に、此の六人の歌を批評してあるので、遂に六歌仙といふえらい歌人となつたのであるが、最も氣の毒なのは大友黒主で、他の

六歌仙の一人在原業平

五人は百人一首にも出て居るが、此の男一人は採られなかつた。加之、小町の歌

の吾妻下り（尾形光琳畫）

を竊んだなどと謠曲の草紙洗小町に作られて、萬世に卑怯な名を留めて居る。最も仕合なのは業平と小町で、業平といへば美男子の標本、小町といへば、美婦人の標本と後世までも謠はれて居る。喜撰法師に至つては、「我庵は都の辰巳」の歌の外、一首も傳はつて居らぬ。但し宇治に住んで居た爲、其の名は煎茶の銘となつて、長へに知られて居る。

やゝ下つた時代、新古今集時代の歌人にも六歌仙がある。これを**新六歌仙**といふ。後京極攝政良經、大僧正慈圓、五條三位俊成、京極黄門定家、壬生二位家隆、僧西行の六人、これは悉く百人一首中の人である。それもその筈、定家と同時代の人で、定家は即ち百人一首の撰者である。これには坊主は二人居るが、女は一人も居ない。

孔子の弟子は三千人、内六藝に通じたものが七十二人あつたといふが、その**六藝**といふのは禮、樂、射、御、書、數。これが即ち支那の周時代の教育法、

否、大學卒業の資格と見える。陋巷に一簞の食一瓢の飲で居つた顏回なども、馬に乘つたり、弓を射たりすることが出來たのである。

六經といふのは易經、書經、詩經、禮記、樂記、春秋。樂記が無くなつて後、其の代りに周禮を加へて言つた。

六國史とは日本紀を第一に、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄。即ち神代から光孝天皇まで、漢文で書いた勅撰の歷史をいふ。

昔の歷史に**六衞府**とあるのは近衞府、衞門府、兵衞府、各左右があつて都合六つ。單に六府ともいつた。

六波羅といふことは北條時代の歷史に見える。京都の六波羅密寺は西國三十三番第十七の札所である。**六波羅密**といふのは(一)檀那波羅密、(二)尸羅婆羅密、(三)羼提波羅密、(四)毗梨耶波羅密、(五)禪定波羅密、(六)般若波羅密。波羅密は梵語 Paramita で、度又は到彼岸と譯す。即ち修行する意味である。

布施、戒、忍辱、精進、禪定、智恵、この六つが無ければ修行が出來ぬのである。

六根清淨の**六根**は眼耳鼻舌身意。つまり五官の外に意を加へたのである。身體ばかり清淨でも、意が清淨で無ければ何の役にも立たぬ。

六字の名號といふのは南無阿彌陀佛の六字。これが一心に佛に歸依する意。南無といふのは梵語で、翻譯して歸命と云ふ。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上と六つに分けて**六道**。六道の辻に迷ふなどといふのはこの意味である。又**六趣**ともいふ。

支那でいふ**六畜**は馬、牛、羊、豕、犬、鷄。その中で日本の神代史に見えるのは鷄と馬だけである。併し馬も後世になつて大陸から輸入したらしくも見える。ウマといふ語は漢字の馬の音である。牛は朝鮮語。犬は可なり古くからあつたらうが、神代史には見えない。すべて家畜の事は昔も今も日本には尠い。日本の上代の人は野獸の肉は食つたが、家畜を養つて、其の肉を食つたことは

無い。日本では唯畜つて置いて使つたばかりである。或人が之を譬へて日本の家畜は、下人が部屋に住んで居るやうなもので、用があれば出て使はれ、用が無ければ休んで居る。之に反して外國のは重罪人が牢屋に居るやうなもので、いつか必ず殺されるのだといつた。

むかし**六親**といふのは、父、母、兄、弟、妻、子。今の民法では一等親、二等親といつて血族關係が主になる。等親を數へるのは縱に親子の關係を見るのである。即ち親と子とはお互に一等親である。祖父母や孫は互に二等親である。親子の關係が二度成立つたからである。伯叔父母は一旦祖父母まで遡つて其の子であるから三等親、從兄弟姉妹は其の子であるから四等親である。

今の官省で部の字の殘つて居るのは文部省ばかり。內務、外務、大藏、陸軍、海軍、司法、農商務、遞信、すべて部とは言はない。明治時代にも工部省と

いふのがあつた。その癖文部も工部も皆明治になつて出來た役所である。昔は刑部、民部、兵部など多く部の字をつけた。支那の**六部**は吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部である。總て何事も昔は支那を手本にしたのであつたが、今では支那の方が却つて日本の眞似をして、官制から學制まで我が國を模範として居る。支那の新定刑法や民法も、日本の學者が行つて編纂中である。

支那歴史で**六朝**といふのは、吳晉宋齊梁陳。日本がはじめて支那と表向きに交際したのは即ち隋の世で六朝の終つた時である。六朝の制度文物は尙殘つて我が國を感化した事が尠く無い。就中六朝の文學が我が國に輸入されて、我が國文學に影響したのは著しい事實である。書法なども六朝風を學んだので、(二)の部にも言つた通り王羲之と其の子王獻之を二王といつて稱へた。羲之、大王をテシと讀んだ事も前に述べた通りである。

漢字の構造に**六書**といふことがある。(一)は象形で物の形を象どつた字。例

へば日、月、木、魚、馬などは皆其の物の形から作つたのである。(二)は指事で事物の性質をあらはして作つたもの。木の字に一を加へて本、末などの字が出來るやうなもの。(三)は會意といつて、出來上つた文字を二つなり、三つなり、連ね合せて、その意を取るもの。木を二つ合せて林、三つ合せて森とする類である。(四)は諧聲。二つの字を合せて半分は義理を取り半分は聲を取るのである。鶴、鷄、鳩、鴿などの鳥は意義。雀、奚、九、合はその聲である。(五)は轉注で其の意を他のものに轉用するので、音樂の樂の字を轉用して樂しむと讀む類。(六)假借は文字の意義如何に拘らず、その音を借りて他の義に用ゐるものである。われといふ字の余を餘分の餘に用ゐる類。

(七)

六朝の第一晉の世に七賢といふのがある。阮籍、稽康、山濤、向秀、劉伶、